桃洞遺筆

第初集

卷一之三

47
2
12

W391
N1

ガラス使用

W391
N1

東京教育博物館印

明治十五年九月卅日購求

紀伊小原八三郎源良直藏書之記

桃洞遺筆巻之一

紀藩　小原八三郎源良直　録

燕子花（かきつはた）　附　杜若（やぶみやうが）

埴津旗（かきつはた）といふ。後頼の萬葉草木異名集（まんえふさうもくいめいしふ）に。顔吉花（かほよばな）とあるをうけがたし。孝經樓詩話（かうきやうろうしわ）に。我（ワガ）邦（クニ）ノ詩人（シジン）。カキツバタヲ彼（カノ）邦（クニ）ノ燕子花（エンシクワ）ニ充（アツ）ルハ誤（アヤマリ）ナリ。然（シカ）ルニ貝原翁（カヒバラオウ）ヨリ以降（コノカタ）ノ物産家（ブツサンカ）モ。皆（ミナ）此（コノ）誤リヲ襲（オソ）フ。按（アン）ズルニ。宋（ソウ）ノ桐郷（タウケイ）ノ

東京教育博物館
類　博物
屬　總記
冊　参
函　廿五
[illegible]
五　五

國立國會圖書
6.9.21

朱輔ガ著ス溪蠻叢笑ニ。蔫子花花紫（本書作紫花ニ）全ツ類ス於蔫子ニ。生於藤ニ。一枚数葩トアリ。生於藤トアレバ。蔓生ノ物ナリ。絶テカキツバタニ非ズ。本邦昔ヨリ杜若ヲカキツバタト訓ズ。謬ナキニ非ズ。近比物産家。杜若ヲヤブミヤウガニ充。予却テ是トセズといふて。銭起。東坡。馬臻などの詩を引て證とし。杜若をカキツバタとせり。尋按るに。此説却て非なり。漳州府志。海澄縣志等ニ。蔫子花。溪蠻叢笑ニ云。紫花全ツ類ス蔫子ニ。一枚数葩。漳人名テ為ス紫蔫ト。とありて。生於藤の三字を削りて此二書によりて蔫子花をカキツバタに充べし。直按ルに。怡顔齋の蘭品に。

明陸思孫古今説海云。宋ノ朱輔。字ハ季公。桐郷ノ人。

余検ニ溪蠻叢笑ヲ。有生ニ於藤ニ三字。漳州志及ヒ海澄志刪ル之ヲ。為ス是ト。豈李公ノ所ノ言。別ニ是レ一種。具（花ノ形チ相ヒ類ス）偶ニ得ル同名ヲ耶。如ニ紫蔫ノ則水草ニシテ而非ニ藤生ニ也といへり。又。[illegible]

明の夏旦が薬圃同春三月の部に烟蘭一即紫蔫。微ニ香とあり。[illegible]若水の結髪居別集に蔫子花を併せて一とせり。形状を記せざれば詳ならずといへども。紫蔫の名によれば又蔫子花の葉與花形微しく建蘭に似て紫色なれば。烟蘭と名づけしを見て。一物とせしも可

なるべし。○杜若ハ文選の離騒ニ出る。六臣注なきにて是何物とも志れず。また神農本経ニ。杜若一名杜衡と記して。爾雅ニ。杜ハ土鹵。郭注ニ杜衡也とあると同名なるをもつて。古人多ク相雑引用ス。故ニ九歌曰。采ル芳洲ニ於杜若ヲ。離騒ニ云。雑ユ杜衡与芳芷ヲ。王逸ガ輩皆不分別。但云香艸ト也。明の時珍が本草綱目蘇頌の説にいへり。又宋の呉仁傑が離騒草木疏に。諸家の説を引て杜若の形状を載せ。杜若をヤブミヤウガニ充るハ。稲若水翁以降なり。蘭山先生の本草綱目啓蒙考ふべし。文繁ければこゝに贅せず。

「直按に。カキツバタ名義一ならず。加茂真淵の冠辞考に。萬葉に垣津旗ハ借字なり。東萬呂に翔燕花てふ意とぞいはれし。げにさる形の花なれバなるといひ」。又或説に垣燕立花と書べしといへり」。又伴信友がかきつばたと考あり。これハ次篇にゆづりてこゝに載ず。

杪欏

暖地の産にして。薩州の西嶋佐多及ビ夜久嶋に多く

ガラス使用

此ノ下ヘ注ニ書ベシ
△直云、ヘゴニ二種アリ。幹の質細ニして硬こはきものを雄ヘゴ一名石ヘゴといひ、幹の質麁くして脆きものを雌ヘゴ一名アラヘゴといふ

産ス。形鳳尾蕉ニ似リ。大なるハ高さ丈餘。周遭四五尺。梢ニ葉出て叢生ス。其葉ハ草蘇鐵或ハ貫衆の葉ニ似て大ナリ。茎長きもの五尺許もあり。木理黒條數百交糾して老防線の如し。其根ハ上より生じ初白く後黒ニ變じ。幹を絡ふて漸々ニ大ニなる。恰も巨き銅絲を亂しゐるが如し。切て門柱とし。或ハ草木を植る盆とし。水土中ニ入て不朽。水ぬけよし。中ニ心ありて厚き昆布の如きもの。菊座ニなり中空なり。土中の根ハ細くして鬆の如し。小なるもの今種樹家ニあり。唯ヘゴといふ。薩州にてハ貫衆をヘゴといふ故ニ。彼を鬼ヘゴといへり。按ニ明の慎懋官が華夷花木續考ニ叙州府志を引て。桫欏葉長數尺。如蕨葉状。伐而剝皮其形萬竅連絡。如刻鏤といふ。即是なり。

直按ニ。八丈嶋にてハ。此桫欏をヒダといふと見えたり。伊豆海島風土記ニ。桫欏の圖を出して。島名ヒダとしるし。近来薩州ヨリ出シテ。世人水臺ナドノ上ニ置キ。草花ノ類ヲヤドシ植ル。ヘゴト云モノ是ナリといへり。

井中養魚

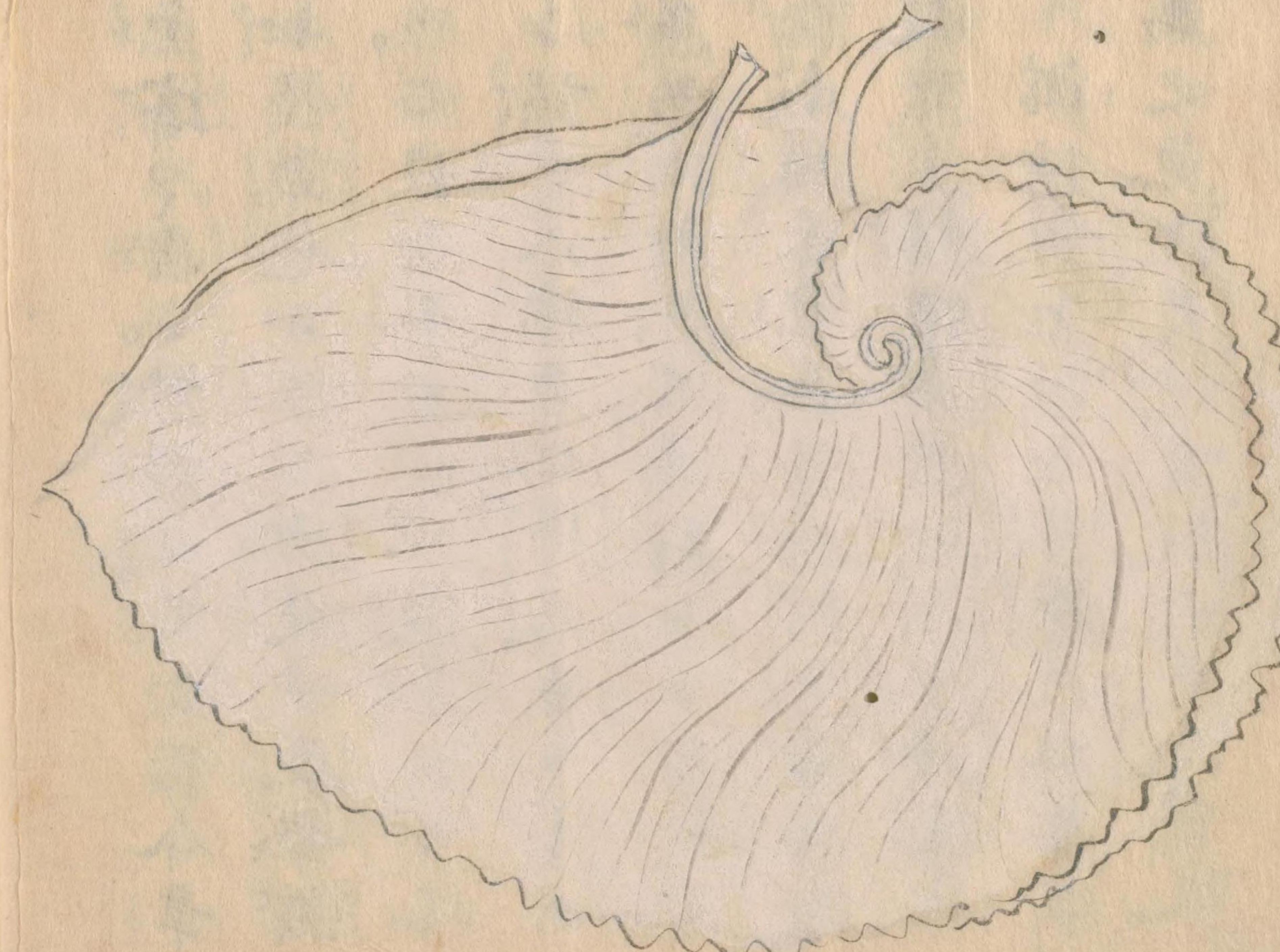
井中に魚を養ふことハ明の徐光啓が農政全書に作井底用木為下。磚次之。石次之。鉛為上。既作底。更加細石子厚一二尺。能令水清而味美。若井大者。于中置金魚或鯽魚數頭。能令水味美。魚食水虫及土垢故也といへり

章魚舟介

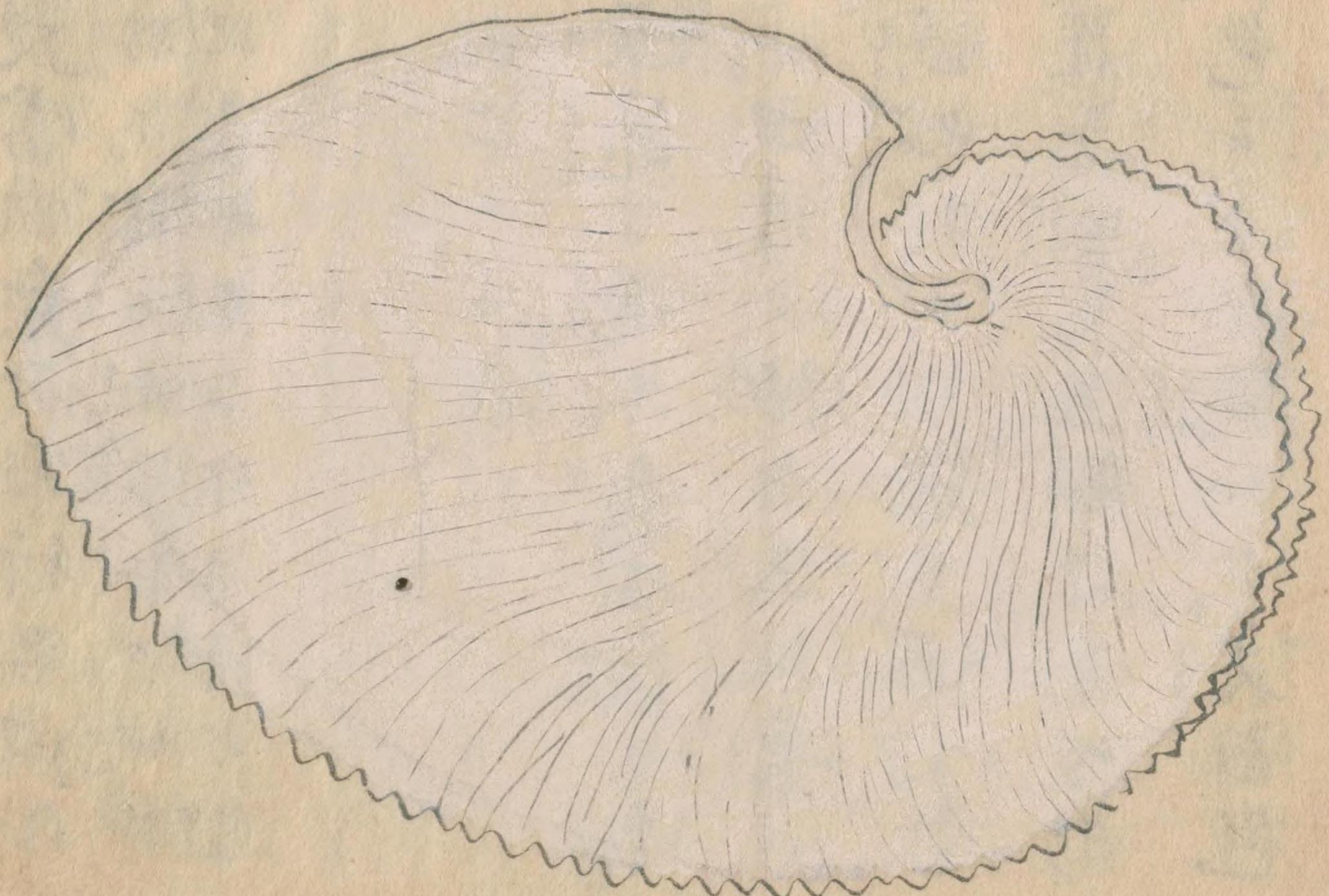
今玩介家に章魚舟といふ介あり。又乙女介ともいふ。大なる者ハ二尺餘あり。形葵介に似て。肌白く文理粗く。幅狭く。其口葵介より濶し。恐くハ葵介と雌雄なるらん。この殻の中に一種の魚寓て居る。本州熊野にて介章魚といふ。形望潮魚の如く白色にして六足あり。章魚類の八足あるに異なり。これを食すれバ微毒ありて時々腹痛すといふ。俗に誤て八稍魚の寄居するものとす。故にタコフネと名あるなり。波濤静なる時ハ。海上に浮び出て。両足を殻後に垂れて遊行す。若物に驚けバ。たちまち身を殻中に縮て海中に入る。予先年熊野大辺路の海上にて游行ぬとみを目撃せり。按に明の艾儒畧が曰。有介屬之魚。僅尺許。有殻。六足。々有皮。

ガラス使用

章魚舟介
幅狭ク口廣く
文理粗し



葵介
幅廣く口狭く
文理細なり



如欲他従則堅半殻当舟張足皮当帆乗風而行名曰航魚と。これ章魚舟形なるべし。（直按ずるに。清の南懐仁が坤輿外紀に。舡魚に作る。清の陸次雲が譯史紀餘に。帆魚に作る。皆同じ文なり。）

縷絳草

又甘孛智朝顔（大和本草）といふ。人家籬に延ふ。或は盆に栽て花を愛る。三月に種子を下し。四月に苗を生ず。葉は繊線の如く。青緑色。形架上の蜈蚣孔れめく。沛ゝ綿ゝとして蔓延る。秋に至る。葉間に花を開く。五瓣にして形牽牛花の如く。大さ三四分。紅色にして観べし。又白色

△此下ノ下ヘ注ニ〆入ル

直按ずるに。瓊崑玉が類書纂要に。蔦蘿寄生也といふは。蔦と女蘿の二物をいふなり。

も有り。実は形亦牽牛子に似て小し。按ずるに。清の翁榴菴が花暦百詠の注に。一種繞名蔦蘿者花類胭脂葉細如織翠極柔媚可観沐雨尤佳といふも此即是なり。山蘭山翁の花彙に。松岡玄達の説によりて。明の王仲遵が花史左編の。繭菊一名棚菊に充るは非なり。藤菊は予が著し花彙正誤に詳に載られ。こゝに略し。

海内一大石

本州熊野古座奥の相瀬村山中渓側に有り。土人一枚岩と呼ぶ。予熊野採薬のとき。縄をもつて量るに。高さ

ガラス使用

百十間横二百四十間餘。壁立す。享保年中に。植村左平次。松本蛇堂野呂元丈の三人。台命を蒙て天下採薬す。こゝ海内第一の大石なりといふと。

日月殻　附海鏡

月日介ハ南海に多く産す。大なるもの七八寸。形正圓。両片とも少し微凹なり。一片ハ深紅色。一片ハ潔白なり。故に月日介といふ。直云。一種紅色の方に。白圏點三ツ有るものを。三光介と云。清俗に。日月殻。また磾礪と云。清の呉震芳が嶺南雑記にハ。日月蛤といへり。其文に曰。海豊水族甚夥。有日月者。蛤類也。直按に。清の馬俊良が。龍威秘書中に收る本にハ。蛤の字を蚌の字に作れり。あやまてなり。大如掌而圓扁。殻半片白半片紅。土人直名之曰日月。とあり

○古説に寧波府志の海月一名海鏡を以て。月日介に充るハ誤なり。直云。順の和名類聚鈔深江輔仁が本草和名並に。海月と水母と併せて一物とす。大に誤也。海月ハ。和名唐鏡介といふ。舶来和産ともに有り。其形圓して薄く。大なるハ径四五分。外濇て内滑に。色純白にして。日に映すれハ紙の如し。両片相合す。一片ハ平に。一片ハ凹かにして肉あり。平なるものを。粗皮を削り去て。鱗次して燈に装ふ。以て紙に代て紙よりも明なり。今琉球よ

大医博士深江輔
仁ハ。法曹類林に。
承平六年侍医
滋根輔仁云々と有
ると同人なるべし
と丹波元簡本艸
和名を刻して提
要にいへり。黙川
道祐が本朝医考
にハ深江輔仁㊥
醍醐天皇御宇
以明医聞于世と
あり

り。此介にて張たる朱骨六稜の小燈を擎ぐ。雨中にまたげさへて損せず。古く垢づけば。灰汁にて洗て新たなるがごとく天窓となる。故に燈籠介とも。窓介ともいふ。せし。

直按に。本草綱目に。海月を玉珧（和名タヒラギ）の一名として。其附録に。海鏡を出し。二物に別つ。誤れり。清の呉儀洛が本草從新の注に。明の屠本畯が閩中海錯疏を引て曰。海月形圓如月。亦謂之蠣鏡。土人多磨礪其殼。使之通明。鱗次以蓋天窓。嶺南謂之海鏡と此下に。本草以海月作江瑤柱。誤矣といへり。此説に從べし。

海鯉

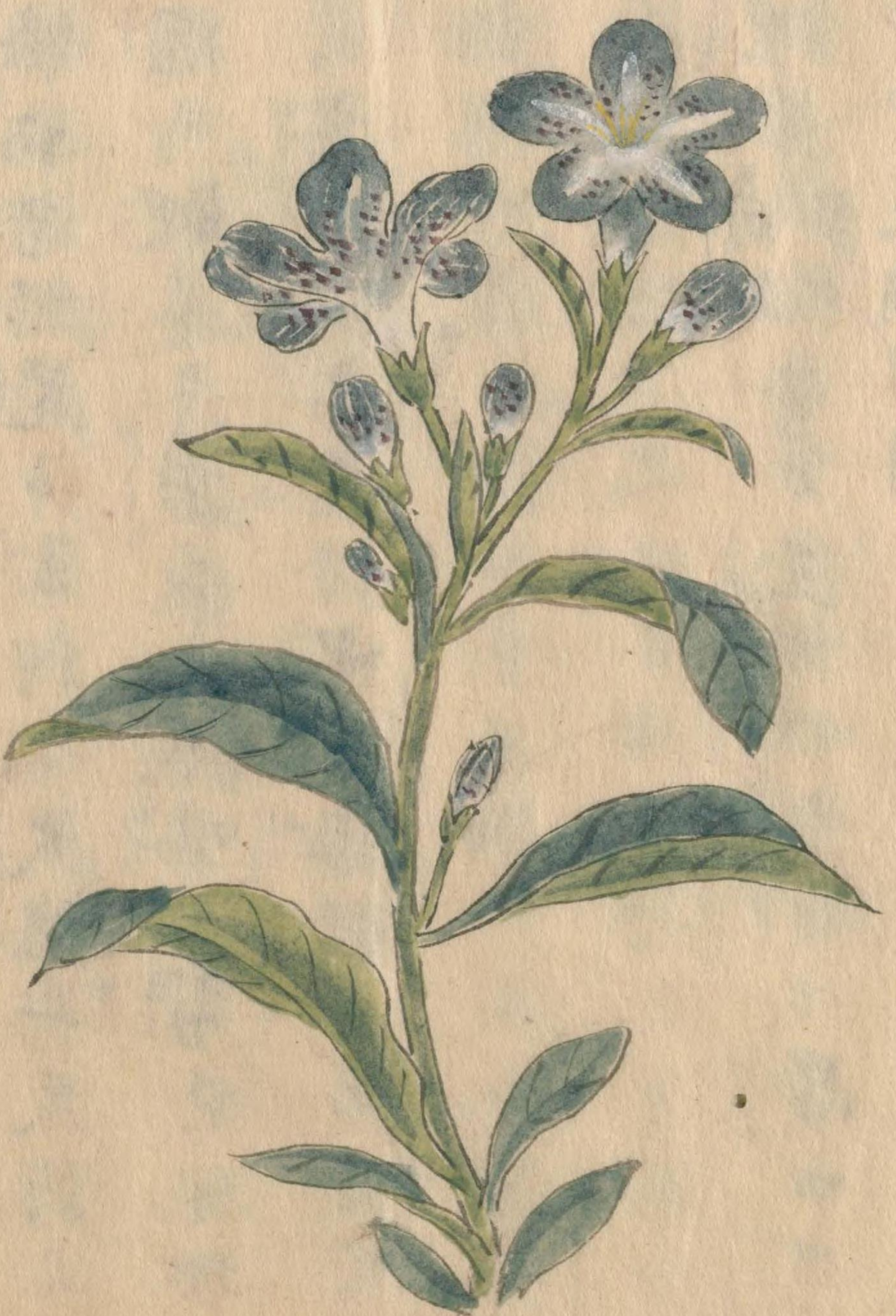
本州海士郡雜賀崎浦にて稀に釣採る。形鯉と同くして。唯腹に細赤條ありて尾に至る。大抵一尺許より大なるはなし。肉ハ鯉より柔にして。味も劣れり。採に。萬暦廣東通志の高州府土産の中に。海鯉をのせて註れし。恐らくハこれなるべし。

翠梅草

螢草ハ。一名瑠璃草。（同名多し）また玉カヅラとも。螢カヅラともいふ。以上の四名。橘保國が野山草にあげる。大なるもハ高さ一二尺許。葉ハ柳の葉に似て厚く糙澁あり。互生す。根ハ蔓と

ガラス使用

翠梅



なる。四月五瓣の瑠璃色なる花を開く。瓣の底白色にして少し紅色を帯る。此草山野にも多く生じて。至て愛すべき草なれども。漢名未だ考ざりしに。近頃花卉百種を閲するに。此草の圖あり。翠梅といへり。

直云。花卉百種は。我官庫にあり。僅一冊にして。花卉百種を集めて圖とし。悉く設色を用ひて真に逼れり。其編也序跋もなく。畫人の姓名を記さず。よりて。先年官より野呂命石にうけたまはるに。明人の畫なるべしとのたまいへり。

ガラス使用

鵜鶘　附 鸕鷀。

鵜の字。古よりウと訓ずるは誤なり。鵜は鵜鶘なり。詩の曹風に。維鵜在梁と。唐の陸璣が毛詩草木鳥獸疏に曰。鵜水鳥。形如鶚而極大。喙長尺餘。直而廣。口中正赤。頷下胡大如數升嚢。好群飛。若小澤中有魚。便群共抒水滿其胡而棄之。令水竭盡。魚在陸地。乃共食之。故曰淘河と。清の毛奇齡が續詩傳鳥名巻に曰。鵜即鵜鶘。水鳥。別名洿澤。又呼為淘河。見郭注。但其名淘河。似鵜淘鶘河。一声之轉耳。若洿澤則又以涸澤取魚為義。陸璣云。荘子曰。魚不畏網罟而畏鵜鶘。或云。以其能竭澤也と。按に。此鳥俗に伽藍鳥といふ。京摂の間に偶來ることあり。先年コンガラ鳥といふて。觀場に供へしもれをみる。形鵜に似て至て大にして。全身白色。嘴は長さ尺餘。濶さ四寸許。嘴の下に。尺許の嚢を垂る。即ち胡なり。志らし常には縮りて有り。水數升を入る。小池の水をかへ出し。魚を取り食ふといふ。ウま

（△此所ヘワリ註ニシテ上ノ直云谷川士清ノ五十字ヲ入ルベシ。）

直云谷川士清の和訓栞にウは産の義とし。万葉集に水鳥を義訓せり。其義にて産屋をふくことも神代紀に見え

本草綱目の鸕鷀なり。其文に。鸕鷀。處ゝ水郷有之。似鶂而小。色黒。亦如鴉而長喙微曲。善沒水取魚。日集洲渚。夜巣林木。南方

口訣ニ、今産屋執之易生とミえたり、

漁舟。往々縻畜數十。令其捕魚といひ。又同書に。韻書ニ。盧與茲並黒也。此鳥色深黒。故名くといひ。唐の李延壽が北史倭國傳に。気候温煖草木冬青。土地膏腴水多陸少。以小環（宋胡仔漁隠叢話ニ作小玨）挂鸕鷀項。令入水捕魚。日得百餘頭（唐の魏徴が隋書東夷傳同文あり）式。明の余庭壁が事物異名に。鸕鷀一名烏鬼。（蜀人云）一名摸魚公（呉俗云）。○古今類書纂要にハ。摸鮮鶯といへり。○此等の説ニて。鸕鷀のウなる事明らかなり。○萬葉集にも鸕坂河鸕養など、鸕の字を用ひたりし[illegible]和名類聚鈔に。辨色立成を引て。大日鸕鷀小日鵜鶘也。大小にて別つ説なり。甚だ誤れり。唐山にても。鵜と鸕鷀とを混ぜし誤あり。清の徐士俊が三百篇鳥獸草木記に。鵜淘河也。一名鸕鷀。又名烏鬼。杜詩所云家々養烏鬼。頓々食黄魚者是也といへり。

紫雲英

蓮華花ハ。一名蓮華草。又ゲンゲ花（京）。ホウホウ花（筑紫）といふ。野生甚多し。三月花を開く。紫白の二種あり。小児其花をくゝりあつめて玩弄し。其葉撒きと紀食ふべし。或ハ其茎葉を馬に飼ふ。これ芥子園畫傳に圖する処の紫雲英。一名荷花紫艸にして。明の高濂が草花譜

△此下ノ注ニ入ベシ
半辺蓮ハ。和名ハタケムシロ。一名レンゲツル。碎米薺ハ。和名タガラシ一名カハタカナと云ものに充べし

尓。紫花児。遍地叢生ス。花蘂可レ愛ス。柔枝嫩葉。摘テ可レ作スレ蔬ト。春時子種スといふもの是なり。良直按ずるに。松岡玄達が食療正要に。紫花児を。葶藶菜に充るハ誤あり。葶藶菜ハ。本草綱目に載る通泉草なり」古説に。本草綱目の半邊蓮。或ハ明の王西樓が救荒野譜の碎米薺一名碎米柴。本草雜草部をもつて。蓮華草に充るハあやまりなるべし。△

黒柿

大明一統志。及び明の鄧景南が一握坤輿の徽州府土産門に。柿心黒木をのせ。これ黒柿なるべし。

幽人筆

清人朱緑池が

○本邦にて萩の字ハギと訓ぜし。その誤まれること久し。詳に次篇に出ス。

図此下ノ小注ニ入ベシ

奥州仙臺にて。末の松山の松氂と。宮城野の胡枝花茎とをもつて。筆管を造る。此二筆ハ。仙臺の名品なり。直云。備前の登々庵の古詩韻範に。肥の長崎に来りて。清くきる、此二筆の賦一篇を附せり。宮城野ノ萩、壽衛山ノ松二筆賦以レ題爲レ韻ト」字あり。[illegible]るべし」図松氂にて造るものハ。幽人筆なり。唐馮贄が雲仙雜記に。汗漫録を引て曰。司空圖隱ル於中條山ニ。芟テ松枝ヲ爲ス筆管ヲ。人問レ之ヲ曰幽人筆正ニ當ニ如レ是ノ。

代々

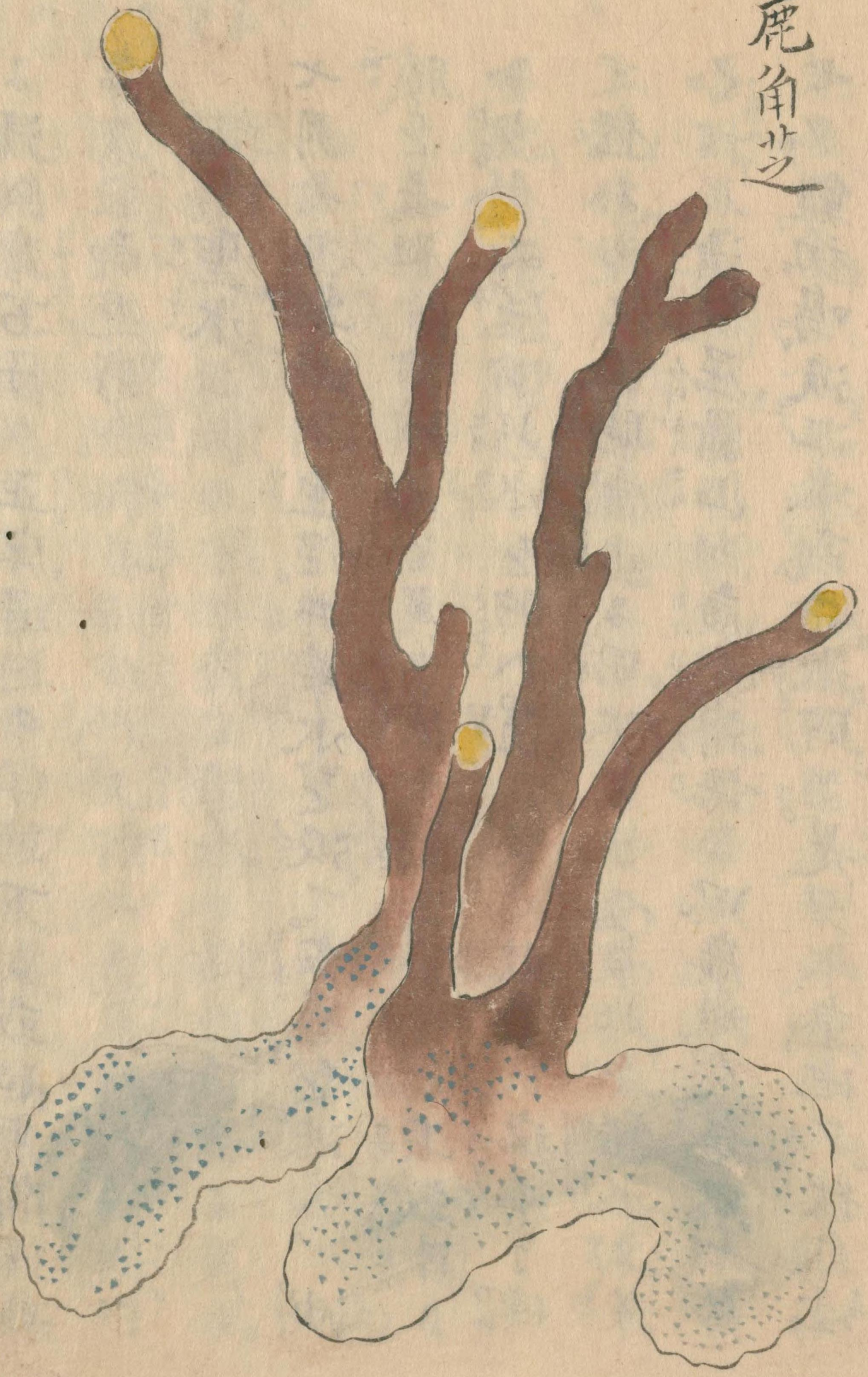
今春盤に供へるダイ〳〵に二種あり。一ハ其蔕五瓣。梅花の如く其下にまた圓蔕あり。蔕二重なり。これ真

物にして。明の黄仲昭が八閩通志に載る回青橙なり。一名唯一蒂なり。俗にカブスといふ。二種真物にあらず。清の陳淏子が秘傳花鏡に載る臭橙なり。代々ハ和名なれども唐山にもあれり。清の胡雲客が日本篇に。櫻桃筍薬竿ニ珍葩ヲ。海棠蚕絲代々久シと注に。代々ハ花ノ名。結テ子ヲ不落。青黄遞リテ変ずといへり。本邦の俗。代々と橙。或ハ臭橘（次に本條あり）を充るハ誤なり。唐山にて古へ橙とおといへど。本邦の九年母なり。明の王藎臣が群芳譜に香橙といふ。今単に橙といへバ。多く惣称に係る。又彝水朱氏談綺に。橙をユズとし。柚ハ上にえびしめありて。紅白二色あることをいふ。二種ハ本草綱目は。柚と朱欒と同類なるゆゑを以て誤りて柚一名朱欒といふ。舜水これが語を襲ふて。柚を朱欒香欒の類とし。紅をいふも。香欒中の上品内紫をさしたるなり。此説南寧府志嶺南雑記にもみえ。従ふべからず。

臭橘誤リ呼テ為ニ枳殻ト

本草綱目の枸橘一名臭橘ハ。和名唐立といふ。今俗に誤りて枳殻といひ。人家に多く植て藩籬とし。枳殻垣

鹿角芝



〽此下ノ下ヘ注ニ入ル
鋏籬笆ハ枸橘樹の一名也。說嵩
小ハ鋏籬塞と
字

といふ。唐山にても此誤あり。清の陳復正が幼々集成に。枳殼鮮者更妙。即臭橘子是也。樹名鐵籬笆。多刺而硬。人家菌塹多植之以禦宵人者といへり

鹿角芝

文化元年甲子の夏。紀州熊野新宮より異芝を出せり。長さ七寸。幅五寸許。一根より二三茎岐ありて鹿角の如く徹し遍し。紫赤黒色なり。光澤ありて漆にて塗るが如し。恰も靈芝の質と同じ。岐頭は円くして深黄色。根茎ともに堅硬なり。其後伊勢の山中よりも出るといふ。按ずるに

ガラス使用

△注ニ入ル
本草云臘雪水抹痱良也

に。清の廖百子が正字通芝の字の下に。或如鹿角といふ者は即是なり。

聖水

七月七日雞鳴に至り。井華水を汲て。古器を洗へバ油膩を去ること妙なり。寅卯辰の刻に至りて。其效漸くに少し。又俗に此水を貯へ置て久く敗れず。痱瘡に傳けて佳なること。臘雪水に同じといふ△。この水を聖水と名くべし。清の屈翁山が廣東新語に曰。廣州ノ人。毎ニ以テ七月七夕雞初テ鳴ニ汲テ江水或井水ヲ貯フ之ヲ。是ヲ夕水。重キコト他ノ夕ヨリ數斤。經テ年ヲ味不変セ。益甘シ。以テ療ス熱病ヲ。謂フ之ヲ聖水ト。亦曰フ天孫水ト。若シ雞二唱スレハ則チ水不然ラ矣。廣州竹枝歌ニ云。七夕江中爭テ汲ム水ヲ。三秋田上競テ燒ク鹽ヲ。南海縣志に曰。七月七日。早ク汲テ水ヲ貯フ之ヲ。經テ年ヲ不敗。謂フ之ヲ聖水ト。

○直指に。聖水同名多し。彙苑詳註（明の王世貞撰と託名なり。）に。李徳裕本傳を引て載る聖水。清の陸次雲が八紘譯史。天竺國の下に載る聖水。荊州府志に載る。太平山の聖水井各別なり。又清の尤展成が外國竹枝詞瓜哇國の下に。新村市舶聖泉請と。注に。新村番

◎此章ノ下ヘ注ヲ入ル

此說本ハ明の費信が星槎勝覧。馬歡が瀛涯勝覧。張昇が瀛涯勝覧集なとに出る。高興史弼ハ二人なり。拜天の上ニ二將の二字あり。

名ニ革児ト。中國ノ人所居ル海灘ニ有ニ小池。名ツク聖水ト。元ノ將高興史弼征ス闍婆ヲ。（明の陸伯生が廣輿記に爪哇ハ國古ノ闍婆國と云り。）遇ニ水拜ニ天ニ禱祝シ。揷ム鎗ヲ地上ニ。隨テ涌出スといふハ。本邦壺井の清水と同日の談なり。◎

金蛇　附　銀蛇

金蛇ハ本草綱目に出て。一名金星地鱔といふ。本草啓蒙に。金蛇ハキヘビ。黄色ノ蛇ヲ云。日ニ映メ光アル故ニ名ク也といへり。予按るに。真の金蛇ハ。此キヘビにハあらざるべし。キヘビも本州にも稀に産す。形常蛇と異なることなし。大抵長さ二尺餘。總身黄色にして。微し黒色を帯び。日に映ずれバ光あり。又清の陳鑑が江南蛇品に載る黄蛇なり。真の金蛇に何れるべきものかいまだ見ず。

直上按ずるに。唐の蘇鶚が杜陽雜編に載る黄金蛇ハ。何物の志るべからず。又朝鮮の許浚が東醫宝鑑の土桃蛇。清の王士正が隴蜀餘聞の黄連蛇。これ黄色の蛇にして。和産詳ならず。

◯銀蛇一名錫蛇。これ亦本草に出る。啓蒙に銀蛇シロ

ガラス使用

ヘビ。一名カナヘビ（佐州）。此品稀ナリ。豫州ニハ多クアリトイフといへり。按ずるに白へびに二種あり。一は常蛇の變じて白色になるものなり。一は至て稀なり。文化甲戌の秋。七月廿六日。ある人本州雜賀川に遊ぶ。水中忽白光あり。杖をもて探りとるに白へびなり。予に鑒定を乞ふ。予真の銀蛇とす。其性緩にして人を恐れず。長さ二尺八寸。全身白色にして。鱗間悉く銀光あり。頭は常の蛇と異にして扁く鱓に似て縦横に赤黄色の條五六あり。眼は黒く眼邊黄にして舌白し。凡て蛇の類は臭氣あるものなれども。此蛇少しも臭氣なし。捕し人これを我西殿に獻る。此を畜しめおかるに。蛙及び種々の生物をもいれてあれども食まず。僅に雞子黄を食ふ。二年の後死す。又先年本府の東南庚申堂にて觀場に備る者あり。長さ五尺餘。全く白粉を傳るが如く小黑斑あり。頭は鱔に似て目は灰青色。舌は灰白色なり。又後衣を脱て潔白銀光あり。これまさ真物なるべし。其後予熊野採藥のとき。北山組の山中にて。白蛇をみること兩度なり。捕へ獲ることを得ざれば。真物の變

也ノツキケハ鮗（上ミ鮗ノ字ナリ又鮗ハ文字）ト書ベキニ鮎モ或ハ鮎モ書ハ徂徠ノ南留別志ニ相ハシムルアルヨリ誤ルナルベシ

称ノ名凡ニ出テ和名ガニトス（此風）鮗音（ト誤ハ）爾雅ノ釈ニ出テ和名ナシウグヒ也（此本草ニ鮗トニ…リ 此ノ如ナキモノ）し 皆ツキニ定ルべき

爪スル日本紀鮗（トウ）ノ字為ヲ魚ニ用ユ 鮗ハ本草ヨリ係ワル 本草ニ見ヘし

日本紀ノ桃花魚ハ和名ノ形ヲ魚ニ用ユハ…ヨリ 鮗ノ字ニ用ユ本草ニ鮗ノ〔載〕ル鯰形ノ名

修セナリ 本草 銀蛇 ○食…陰火ヲ以テ蒸キ一〇山中の大川ナシ定ム下

温石 河朔訪古記

登魚ノ下

菜魚ノ下

鯊魚ノ下

生り知べからず。又肥前佐賀脊振山（岳といふ）信に辨才にて。毎歳四月辨才天の祭に。白蛇出ることあり。是亦真の銀蛇なりといふ。然とも予いまだ見ることを得ざれバ。其真偽定むべからず。又和名に銀蛇を呼ぶ者ハ。大腹皮中の小蟲にして甚稀なり。長さ二三寸。闊さ一分許。蛇の形にして。首ハ龍の如し。體に小鱗あり。全身銀色。首ハ微紅なり。嘗て聞く。先年阿州にて。草綿中に二尾を獲るものありて。阿州侯に獻つるといへども其実否を志らず。

馬尾蜂

馬尾蜂ハ。本州にてハ。枯朽たる朴樹の中に多く生ず。性懶惰にして高く飛ことあたはず。形稺蜂に似て小く黄赤色にして。翅ハ稺蜂に同じ。黒斑あり。尾の尖より長さ六七寸許の尾毛一本あり。色黒し。死る時ハこの尾三筋に分れて。半旋巻す。先年山城嵯峨の奥にて。薪を裂て其中より多く飛出ることあり。此蜂漢名詳ならず。疑ハ本草綱目に載る獨脚蜂の属なり。獨脚蜂ハ予が友小原桐山。獨脚蜂記を著して。龍骨一家言の附録にのす。よりてこゝに略す。

對青竹

附 對金竹

金銀竹ハ。一名金竹。京。○金竹同名あり。明の周文華ガ汝南圃史ニ。金竹幹ノ色純黄似金ニといふハ。廣東新語の黄皮竹なり。杭州ニて黄竹といふ。對青竹の溝も黄色なるものなり。本草啓蒙ニ。薩州ニ金竹アリ。黄ニ〆青色ナシ。節間長サ二尺許。留ニ作ルべシといへるハ。予未ダ見ず。又筋竹（種樹家）○筋竹も亦同名あり。紀州有田郡山保田山中ニ。方言スヂ竹と呼ぶものを産ス。形女竹ニ似て。質白粉を傳ふるが如く。竪ニ青色の條六七あり。これ臺灣府志附考ニ。臺海采風圖を引て。七絃竹。幹白。有青線紋五六七條。葉與竹同といへる者類なるべし。又漢名の筋竹ハ。長サ二丈許。圍數寸。至テ堅利。南土以テ為矛。其筍味成竹ノ時。堪成弩絃也。晋の戴凱之ガ竹譜ニみえたり。これハ和産詳ならず。とも。大名竹これ亦同名あり。大和本草ニ。大名竹和名なり。節間長ク赤黄ノ條アリ。竹葉ニ〆不堪為器用といふハ漢名詳ならず。又臺明竹と書く。

ときハ。隅州噌唹郡清水山の産も。キンメイ竹（本草正偽）と名竹にして。同音異物なり。もいふ。竹の質黄色にして。溝ハ處緑色の筋あり。宋ハ趙溍が養痾漫筆に。成都古今記を引て曰。對青竹。竹黄而溝青。故每節若間出。云此竹今浙中亦有之。惟會稽頗多。彼人呼為黄金間碧玉。（直按に。宋の許歡が東齋記事亦同文なり。）明の謝在杭が五雜組に曰。有黄金間碧玉竹。其節一黄一碧。正直如界然と。清の方以智が物理小識に曰。成都黄竹溝青と。是等皆金銀竹なり。又一種竹の質緑色にして。溝黄色なるものあり。これ俗に黄金間碧玉竹ハ如く多き

なし。これ彼國によりて金銀竹といふ。明の王世懋が学圃雜疏に曰。金竹中尤美者。曰黄金間碧玉。色澤殊常。中界一道緑。尤可愛。有一種大者。曰碧玉間黄金。稍不逮。然與黄金竹相對。廃一不可。余園中俱不乏之。（直按に。明の馮可賓が廣百川学海。明の陶珽が續説郛等に收むる学圃雜疏ハ畧本なる。竹の事を載ず。明の高寄齋訂正の廣秘笈本なり。）中の即ちこの碧玉間黄金竹なり。又對金竹ともいふ。宋の張禮が遊城南注に曰。韋中伯園中。有對金竹。其狀與對青相似。（直按に。清の陳元龍が格致鏡原の小本に。似の字を反の字に作る。）長安有此竹者。惟處士蘇季明張忠道與中伯三家而已。

ガラス使用

中秋具餅芋

中秋に餅芋を具ることハ。唐山にて。明の馮應京が月令廣義に曰。燕都士庶。中秋饋遺月餅西瓜之屬名看月會。明の田汝成が熙朝樂事に曰。中秋民間。以月餅相遺取團圓之義。是夕人家有賞月之燕。廣東新語に曰。八月蓼花水至有月則是歳多珠。爲大餅象月浮桂酒剝芋。有十四種。以黄爲貴。南海縣志に曰。八月十五夜具酒熟芋。邀朋賞月。重修惠州府志に曰中秋士民具酒饌會親朋薦新芋。婦女則拜月卜祥兆。長樂志云。熟芋去皮而食名曰剝鬼皮。清の蔣雲會が藝苑名言に。明の曹學佺が蜀中詩話を引て曰。有高士集中秋對月吟云。隔離呼酒來烹芋。又恐鄰家索酒錢。以上の諸說本邦の看月會と相似り

直に按に。先年浪華にて唐山の月餅渡りしといふものを見せり。白麪を以て製し。形圓く徑一寸七分。厚さ八分許。外の皮蒸餅の如く。燒て鵝黄色をなし。表に赤き色をもつて匡郭をなし。郭中に百果月餅の四字を印し。中に餡あり。其餡白糖に胡麻肉桂末を少し

ガラス使用

加へ。酪にて和したるを好也。

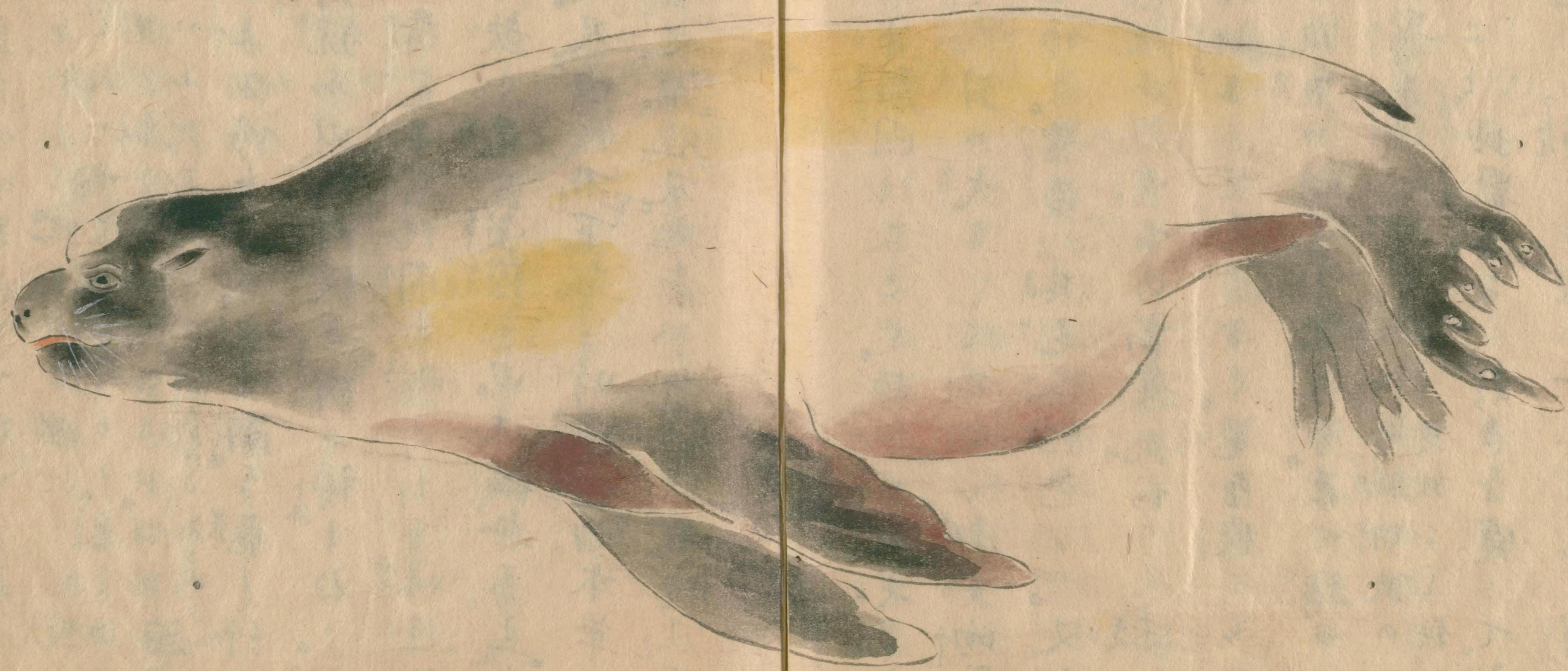
海瀬

本州日高郡衣奈庄大引浦より。地方を離ること四丁許にして。周圍百四十間餘の小嶋あり。毎年秋の土用前後には。海獺此嶋に来りて。春の土用前後には。何地にか帰る。故に此嶋を往年より葦鹿嶋といふ。海獺は本草綱目に出る。和名葦鹿。（和名類聚鈔。夫木和歌鈔に。あしかとよめるえぞ云の歌）なり。伊豫にては。誤りてアシカといふ。又ウミヲソ（誤りてウミウソとも云）又ウミカブロといふ。小なるものは長さ五六尺。大形なるものは

一丈二三尺に至る。形図のごとく。頭小く。口尖り歯牙犬の歯牙に似たり。目は大にして耳至て小く。吻鬚粗く長し。全身短毛あり。常品は其毛茶褐色なり。又白色黒白雜色。蒼黒色もあり。左右の前鬐爪ありて末に岐あり。尾は獣尾のごとくにして至て小く。尾を挟みて又両鬐あり。此鬐も爪五ツありて末は分れて指のごとし。奥州津軽にて。此鬐をテツピといふ。又膃肭獣の鰭も奥州にて鉄眦と名け。食用にあること。採薬使記にミえたり。此獣毎に人なきを窺ふて。岩上に出て。十四五尾より多きときは二三十尾も群居る。

ガラス使用

海獺



若人をとると犯ハ。忽鳴て群輩至て海中ニ飛入る。一説ニ。晝ハ石上ニ群をなして睡る。中ニ睡らずして窺ふとの一尾あり。人を見れバ鳴て群を驚かし。悉く海中ニ飛入るといふ。此説然るや否やを知らず。俗諺海中をニ。アシカノ番といふハ。これより出たるなり。行時ハ。半身を水上ニあらはし。立て潮を飛し行く。甚畏るべき状なり。鳥銃を以て打捉る。皮ハ褥となし。或ハ馬具ニ用ひ。或ハ荷包ニ製し。肉ハ剛くして味佳ならず。本草ニ主治を缺く。東醫宝鑑ニ曰。味鹹無毒。主人食魚中毒。魚骨傷人。及喉鯁不下者。時珍食物本草ニ曰。味鹹甘平無毒。食之消腫及瘰癧邪気結核骨ハ焼灰服治

⊕此下ノ下ヽ注ニ入ル

釋日本紀ニ。海驢を海馬也と注せるハ誤なり。海馬ハ程産詳ならず。海驢ハ山東通志ニ出。文登縣海中。狀如驢。常ニ於秋月登島産乳。其皮製為雨具。水不能潤とあり。貝原翁ハ此文をひきてトヾニ充る。今暫く此説ニしたがふ

皷脹腫満。又脂ハ金瘡ニ傳て良なり。

直云。一説ニ。海獺の大なるものを。蝦夷ニてトヾと云といへり。又本居宣長の古事記傳ニ。書紀の海驢此云美智⊕とあるをひき。紀の國ニて阿志加ハ。思ふニこれ海驢なるべしといへり。按ニトヾとミチとハ同物なり。今も阿州ニてハ。トヾをミチといふよし聞り。アシカと是同類ニして別物なり。形海獺より大ニして。體ハ痩せ。其毛淡茶色ニして。左右の鰭ハ。海獺よりハ短し。これをもつて異とす。此外ニ海

ガラス使用

豹（ラシ）猟虎（ラツコ）。膃肭獣（ヲツトセイ）。其餘（そのほか）海獺（アシカ）の類（るい）は海獣甚多（はなはだおほ）し。別（べつ）に記（しる）せり。

桐洞遺筆巻之一　終

桃洞遺筆巻之二目録

龍涎香（りやうぜんかう）
苦潮（にがしほ）
拳猴（このてざる）
海粉（うみふん）
附　海索麪（うみさうめん）
鶻嘲（かむりどり）
赤鯽（あかぶな）
大茴香（だいういきやう）
天梅（てんのうめ）
鬼面蟹（へいけがに）
錦雞児花（きんけいじくわ）
佛法僧鳥（ぶつぽうそうてう）
木葉石（このはいし）
附　深山烏（みやまがらす）
慈悲心鳥（じひしんてう）
盧橘（ろきつ）
海豆芽（めかじや）
暖皮（どんぴ）
鼦鼠（しまねづみ）
附　鼪鼠（まみろねづみ）

紫陽花　附八仙花

握雪礜石　即蜘蛛の血石

桃洞遺筆巻之二

紀藩　小原八三郎源良直　録

龍涎香

本草啓蒙に。龍涎香をもつて鯨糞とし。今暫くと此説に従ふ。大抵唐山にても此説を。結髦居別集に載せ。荷蘭此説ハ。宇田川榛齋の遠西醫方名物考に載せ共に茲

に畧せり。此品和産舶来ともにあり。和産は。肥前平戸。土佐羽根浦。本州太地浦等より出る。俗に鯨糞。或ハクヂラノフンと呼ども。鯨の糞をいふにはあらず。別に鯨の腸中に結成せるもの。即ち鮓荅の類なり。而して六鯨（脊美鯨、座頭鯨、兒鯨、長須鯨、末鯤鯨・鉛錘魚鯨・此六鯨をいふなり、）各此物あるにあらず。特り末鯤鯨（一名香鯨）[illegible]に限りてあり。末鯤鯨魚ごとにあるにもあらず。太地浦にて鯨糞を獲るもの。古ハ十四五尾の中にて偶一二塊採り獲るものありといふ。近来ハ甚稀なり。慶長年中より鯨をとり始て其頃の事を委しく知らず。貞享三四。元禄六。寶永二三七。寛政六也。貞享より今に至り總に七度なり。末鯤鯨の大腸中にあり。形土を湿し練たる如くにして堅きこと石のごとく。汚屎の中にまじりあり。汚屎とハ自ら別なり。只此物にハ。烏鯯の嘴多く纏ひ着たり。此にて鯨糞たることを知る。汚屎中より取出し。器に入て水にて洗晒こと也。晝夜三十日許にして。汚屎の臭氣を去りて用ゆ。製法土人の極秘なりといふ。其形凝結して松脂の如く。或ハ蝋の如く。嚙ば齒に粘着す。其色に数種あり。

黄白なるを蝋糞（太地）といひ。白きをシラフ（土州）といふ。倶に上品なり。淡赤なるものをアカフ（太地）といひ。黒白相間る者を。胡麻糞（太地）。一名胡麻フ（土州）といひ。黒きをクロフ（太地）といひ。淡黒にして砂の如きものを砂糞（太地）といふ。是等は皆下品なれ。又稀に蒼き者あり。下品なれども蒼糞といふて珍とされ。惣じて塊の大さも亦同じからず。魚によりて塊の多少あり。或ハ一塊二三塊。或ハ十塊二十塊あり。其重さも亦多少あり。偶数塊にして数貫の重ある者ありといへども。いまだ見ず。多くハ二三塊にして重さ四五百銭に過ず。真偽を試るに。少許火に焼て薫陸なる香をなし。煙直上するものを真とし。其香氣よろしき者はあらず。明の彭大翼が山堂肆考徴集に。龍涎無㆑香。其氣近㆓于臊㆒。白キ者如㆓百薬煎㆒而膩理。黒キ者亞㆑之。如㆓五靈芝㆒（古今類書纂要作㆓五靈脂㆒）而光澤能ク發㆓衆香㆒。故ニ人常ニ用ヒテ之ヲ以テ和ス㆑香ニといへり。

直按に。今の龍涎香ハ。末鯢鯨の蝋にて贋造するものも多し。然ども瘀を愈し。痛を止る等功あり。其薬用に効あること也。或ハ海中産土中産あること也ハ。予が

ガラス使用

著はし鯨志正誤。及び刺鯨聞見録に詳かに載たれバ。こゝに略せり。

鬼面蟹

平家蟹は。一名島村蟹。（摂津）武文蟹（同上）○大和本草に。一説ニ武文蟹ハ鬭魚也ト云。未ㇾ知二是非一ヲといへり。鬼蟹。（紀伊）幽霊蟹。（同上）清常蟹。（豊前）治部少輔蟹。（長門）（伊勢）戎蟹。（備前）本邦諸州に産すれども。西南海殊に多し。大なるハ甲の大さ尺餘。小なるハ寸許。至て小なるハ鰕菜の中にも雜りてあり。足ハ常の蟹と異にして。長短相交りて生じ。四足ハ至て長く。四足ハ短し。螯ハ常の

蟹より小なり。甲面甚怪異にして。眉目口鼻歴々として具れり。宛も鬼面の貌なり。俗に傳ふ。秦の武文海中に沒死して。其怨寃化する處といへり。或ハ。後奈良帝の享禄辛卯の年。摂津尼ヶ崎合戦の時。島村弾正左衛門貴則の霊此蟹に化すといふ。皆妄言なり。按に。宋の傅肱が蟹譜に。呉沈氏子。食フ蟹ヲ得タリ背殻若キ鬼状ノ者ヲ。眉目口鼻分布明白。常ニ寶ニシテ翫ブ之ヲといふ是なり。又明の祝允明が野記に曰。嘗テ得タリ八公牒ヲ列スニ海味ノ名ヲ漫ニ筆ス之ヲ云。彭蜞。鬼面蟹。竹蟶。毛蟶。　これ鬼面蟹も同物なり。

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆．巻1～3,附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

直按に。續修臺灣府志に。使槎録を引て曰。鬼蟹。状如ニ傀儡。孫元衡有レ詩。云。家在ニ蠔山ニ屋氣開。鯨潮初起テ蛋帆来ル。市漁鬼蟹紛トシテ無レ數。就テ裏ニ難レ求ニ蛤蚌胎。

こは鬼蟹と亦同物なり。

傳
ヌリベし
後篇ヘ出ス
無し

苦潮

貝原篤信の大和本草に。六七月極暑ノ時ニアリ。雨水海ニ入テ後。旱ノ暑熱ニ逢テ腐リ。味變ジテ苦クナル。海魚飲レ之必死ス。陸ニ近キ所ニアリ。陸ニ遠ケレバ無レ之といへり。按に。文政三年辰の冬より。翌年巳の春に至り。本州田邊の近海悉く凝滞し。潮漸〻に腐りて藍澱汁のごとし。磯魚多く死る。これ入海にして。潮ゆかで凝滞せるなり。此辺にては。古来より大寒の節稀に有て。大暑の節に有ることを聞ずといふ。

錦雞児花

明の周憲王が救荒本草に曰。壩齒花。壩一本ニ作ル（壩。音罷。）本名ツ錦雞児花。又名ツ醬瓣子ト。生ス山野ノ間ニ。人家園宅ノ間ニ亦多ク栽ウ。葉ハ似テ枸杞ノ葉ニ而小。毎ニ四葉攅生ス一処ニ。枝梗亦タ似テ枸杞ニ。有リ小刺。開ク黄花ヲ。状類ス雞ノ形ニ。結ブ小角児ヲ。味甜。採リ花ヲ煠キ熟シ。油鹽ニ調ヘ食フ。炒リ熟シテ

此所圖ナリシヲシ前ニ一條又ヌケバ
イチアシリソくくバよろしく
のこし申てくれ
丁數ノ多キユヘヌリモノ也
下の條きぬき

喫茶ニ亦可ナリ。　按ニ。今種樹家ニ。金雀児樹と呼ぶものあり。或ハ偽て唐種の白鮮とよぶ。（直按ニ。金雀児椒も。ニと白鮮の一名なり。今薬店ニて此根皮を採て。白鮮皮ニ充て售る。故ニ花ニ姑まて。金雀児樹の名を假り用ゆ。白鮮のことか。別條ニ詳ニス。）本ニ清種なり。小木ニして高さ二三尺。叢生ス。木皮黄褐の竪條あり。枝互生ス。葉ハ枸杞ニ似て小く。四葉一処ニ攢生ス。本ニ小刺あり。三月の末黄花を開く。形圖のごとし。花後小角を結ぶ。冬ニ至りて葉枯る。根白色ニして長く臭気あり。此草錦雞児花ニよく的當ス。師説ニ小ツクバ子を以て充るハ穏ならず。直云。

ツクバ子と名づくるもの品類多し。次篇ニ詳ニするのみ。

候も
存候

拳猴

廣東新語ニ曰。瓊州多シ猴。以テ小ナル者ヲ為ス貴ト。曰フ拳猴ト。大ナル者ヲ曰フ獼猴ト。亦タ曰フ母猴ト。母ハ非ナル牝ニ也。嶺南雜記ニ曰。石猴小ニシテ如シ拳ノ。出ツ高州化州羅定等ノ處ニ。可シ于筆筒中ニ睡ル。淵鑑類函ニ崇安志を引て曰。武夷山ニ多シ獼猴。其ノ小ナル者僅ニ如シ拳ノ。按ニ。拳猴ハもと嶺南の産ニして大さ僅ニ三寸餘あり。木葉ザル。一名豆ザル（江州）といふ。

佛法僧鳥　・附　深山鳥　慈悲心鳥

ガラス使用

直按ニ日本紀略ニ云延喜六年八月右太臣修法華八講仏法僧鳥来鳴

佛法僧鳥は。一名三寶鳥といふ。高野山。及び日光。比叡。松の尾。鳳来寺等の深山中に産す。性霊集に空海の詩（後夜聞佛法僧鳥）を載ていはく。閑林獨坐草堂曉。三寶之声聞二一鳥一。一鳥有レ聲人有レ心。聲心雲水倶了々。躬恒集に云。延喜十八年八月十三日。左太臣の家に八りうまるに。佛法そうといふ鳥のなきけれバ。よみてたてまつるなかにさ。「あしひきの。山にすむらん。ものゝふも。みやへにやはれく。いかりかきハ。しげきをやしも。おほゆる紙。たりきをやしも。おまさわきぞ。をねうちいぶき。ときびをぞて。春夏冬は。時をわかと。君がわきしぞ。もみぢ葉のからくれなゐに。ありいでゝ。わく袖をさらに。きりせるめつる。「山にもりしすれにきこゆる。鳥る聲も里にも君が。秋よりほかにく。「其の人も。君はつきしも。せしそはを。いつでか忘れん。う称て志りなん。野山名霊集に

後鳥羽ノ文字書クワイニテシメノカニナレバ後ノ字ノ上三字アケテ読ベシ

後鳥羽院御製「我國は。法はなかりき。所にて。鳥も佛法僧とこそなく。又太閤秀吉公の歌「聞くこし。鳥もこれにを行ひの。声を高野に。有明の月。此外に夫木和歌鈔にも（此鳥の歌にあり）此鳥雄なる者ハ。形鳩の如く。痩て小さく。頭淡

注文　遍照発揮性霊集の鈔に曰。仏法僧鳥。典籍所載。未有所見。余嘗親聞于南山摩尼峯。上其声似呼佛法僧也。

黒く。羽毛緑色にして。腹背碧緑交り。咽下碧色。翼及び尾端黒色。嘴細く鳩の如く。脚も共に赤色なり。鳴声ブツポウソウといふと。或ハ雄をブツポウと鳴き。雌もソウ〳〵と鳴和するともいふ。予未だ其声を聞ず。野峯畧記（文化六年成）に。蓋非暗夜不囀といへり。雌なる者ハ。同形にして。全身淡黒に白毛雑り。深黒斑あり。喉及び腹白色に黒点あり。嘴淡緑にして脚淡褐なり。◯田宮氏の橘菴漫筆二編に。梟の類とするハ非なり。蘭山先生の説に。鳩の属とせり。漢名詳かならずといへり。按に明の慎懋官が華夷鳥獣考に。九華山志を引て曰。念佛鳥大如鳩。羽毛黄褐翠碧間而成文。音韻清滑。如誦佛声。一名ハ念佛子。唐常蟾が詩に。静聴林飛念佛鳥。細看壁畫駄経馬。念佛鳥此有之也。◆清の王漁洋が池北偶談に曰。王得臣が麈史に。安陸有念佛鳥。小於鸜鵒。色青黒。常言一切諸佛。宋の元憲詩。鳥解佛経言。張斎賢守郡日。為作古詩一篇。此念仏鳥ハ。佛法僧の属なるべし。◯深山烏。一名ダケガラス。即爾雅に鸀ハ山烏といふ是なり。鸀ハ音蜀。山海経の鸀も別物なり。◯直云。本草時珍の説に。山烏一名ハ鸐とあるハ。鸀の字を誤れり。此鳥深山に非ざれハ。巣

◆直按に徐氏筆精明の范泓の典籍便覧にも此文あり

ガラス使用

をなさゞ。形色甚だ佛法僧鳥に似て。躰肥大にして嘴
巨し。（形状本草啓蒙に詳なり。）故に俗に此鳥を誤て佛法僧鳥とい
ふ。明和三癸卯の春。洛の東北上加茂の社地樹林中に。
佛法僧鳥来るといひしも此深山鳥なり。混ずべからず。

◯慈悲心鳥　或説に。佛法僧は雌雄なるといふは。大
なる誤なり。此鳥只日光山に産ず。他山絶てなしとい
ふ。享和紀元辛酉の夏四月。蘭山先生　台命を蒙り
て。常毛諸山に採薬す。予従之。五月日光山にいたる。山
に入より屢其声を聞く。清亮にして慈悲心といふが
ごとし。一日適樹間に就て其形状を悉せり。惣形鷹に似
て。大さ白頭公よりも一層大きく。頭背翅尾共に黒し。胸
腹淡褐色。尾長くして濶く。面は褐色に横條三行あり。
裏淡褐色にして。細黒斑横條又三行あり。嘴脚黒し。宮地
雉則が常毛採薬録に。榛名山地名考を引て。古記ニ戒
行鳥ト云ハ。恐クハ即是ト云ヘリとあり。又一説に云。
佛現鳥といふ山禽は。華夷鳥獣續考に。蜀ノ大峨峯普光殿ニ
有二佛現鳥一。狀類二鵂鶹一。飛鳴近レ人ニ。其声圓轉。山僧呼テ為二仏現
鳥一トとあり。是非を[illegible]らず。

直按ニ。明の陸深が。蜀都雜抄ニ曰。峨眉ハ古今ノ勝地也。山中光怪若ク虹蜺ノ然リ。毎ニ見ル于雲日映射ルノ之際ニ。所謂佛光ト云者是已。佛光未ダ発セ時。有テ鳥先ヅ飛ビ過グ。若シ言フガ施主發心菩薩来到ト。光既ニ散ズ。復タ来テ作ス声ヲ。施主布施。菩薩去了ト。又曰。鳥声只三字。若シ言フガ佛現了ト。其鳥類ハ雀ニ而稍々大ナリ。只有二枚。別ニ無シ種類。三鳥飛テ入リ佛殿ノ中ニ。當テ就ニ僧食ニ。但不見有ル長育耳。伊藤長胤の輶軒小録ニ曰。高野山ニ佛法僧ト鳴鳥アリト云。日光山ニ慈悲心ト鳴鳥アリト云フ事。昔ヨリ和歌ニ詠ジ。人々傳誦スルヿアリ。是モ唐ニアリ。蜀都雜抄合セ按ズベシ。凡テ鳥獣ノ音。雖唐ノ声此方ノキヽヤウニ依テ様々ニ聞取ナリ。深山幽谷禅佛ノ境ニハ。常々佛事ヲ談ジ。佛語ヲ誦スルニ依テ鳥獣ノ音ニ佛事ニ聞ナスト見エタリ。何事モ人ノ心ノ呼ト知ベシ。

海粉　附　海索麪

今清商長崎ニ齎シ来る海粉といふ者あり。俗ニカイフノリといふ。尤和産なしといへり。形鹿角菜の如く。緑色或ハ黄色なり。水ニ浸して燈心を束ぬるが如し。

多く料理ニ用ゆ。生食して味淡し。小毒あり。薬用とし
て能痰を化し。瘰癧積塊を消し。煩熱を治すといふ。明
の何喬遠が閩書ニ曰。海粉。状如緑毛亀。無介純肉。背有
小孔。海粉出焉。晴明収之則色緑。陰雨収之則色黄。清
の虞聞子が諧声品字箋ニ曰。海粉母。如墨魚形。大三四
寸。冬畜家中。春種海濵田内。色緑似荷色。飲従此入。浚従
此出。今海粉即所浚也。故吐海粉者謂之母。或曰。挿竹枝
田中。母縁枝吐出成粉。（直按ニ。物理小識。正字通。康熙字典等ニも此文あり。）廣
東新語ニ曰。海珠状如蛞蝓大如臂。所〻如海菜於海濵浅
水。吐絲。是為海粉。鮮時或紅或緑。随海菜之色而成。曬晾
不浄法則黄。有五色者。可治痰。或曰。此物名海珠母。如墨
魚大三四寸。海人冬養於家。春種之瀕海田中。遍挿竹枝。
其母上竹枝吐出。是為海粉。乃遅舒展之。始不成結。以點
羹湯佳。嶺南雑記ニ曰。海粉是海邊蟲食海菜之糞。蟲
如蛞蝓大如臂。食緑則緑。食紅則紅。但緑色者多。以清脆為
佳。若黄色爛結不貫矣。紅者可治赤痢。今諸州海邊巌
石上ニ海鹿といふ物あり。一名フルワラジ（常陸）又雨フ
ラシ（伊勢）。土人の云。此海鹿を殺せバ。たちまち雨降る故ニ名くと。妄説之。
海ガラス（本州雑賀崎浦）

イツンド。（同上）シトッポ。（同田之浦）ジダイドノヽ馬。（同加田浦）ともいふ。形大なる蛞蝓の如く。又沙噀に似て圓し。大抵二三寸より四五寸に至る。頭尾口目辨じがたし。唯一端に肉角二ツあり。此處頭なるべし。其色青紫白黒等あり。これを手に觸るれば沙噀のごとく縮みて能蠕動す。これを裂ば紫黒血いづる。大和本草に煮テ食ス味厚シ。峻補ノ性アルベシといへり。浮按ずるに疑らくハこれ海鹿ハ海粉母。海珠にして。此腹中に譬へば沙噀の腹中にコノワタあるが如く。海粉あるべき形なり。されどもかく思ふ

なきにて。実はいかなるものとしらざれば究て海粉母ともなしがたし。尚後の考を俟べし。又東南海中に産する海索麪といふものあり。形索麪の乱れたるが如く。青色にして淡紅色を帯る。質柔脆にして之を嚼ば声あり。[illegible]。味美にして毒なし。海粉はこれなりといふ説は無稽の言なり。これは閩書に。線菜生海中沙地上。其長如線。色微紅。出漳浦といへる是類なるべし。直接に倍に縄絲海苔と呼ものあり。形太き絹絲を束ねるが如く。其色青黄赤白等あり。生物を羹として食するに。時々腹痛することあり。之を乾せば舶来の海粉と一般なり。因て前に載る諸説と併せ考るに。縄絲海苔は海粉にして。海珠即海鹿の吐処ならんと思ひ。毎に雑賀崎浦に遊びて土人に質問けるに。縄絲ノリを方言にカラスゴ（即海ガラスの子なる畧）といふ。春月は此海苔ある処必も海ガラス（海鹿一名）ありといへり。其後復同浦に遊びて。海鹿の腹中を割たるに。果して細き縄絲ノリあり。これにて海粉母。海珠は海鹿にして。海粉は縄絲海苔なることを疑なし

し。清の李静渊が行厨集及び續脩臺灣府志に。海粉を菜部に收入る。これハ海藻類と見誤りしるなり。五雜組に。持齋者常誤食之といへり。◯本草綱目曰、海蛤粉ハ者。海中諸蛤之粉。今人指称但曰海粉。又同書汪機の曰。海石ハ即海粉。又事物異名に曰。塩一名海粉。以上同名異物なり。

木葉石

本邦諸州に産る。総て木葉地に落て上に土集り年を経て石と化したるものなり。質に軟硬あり。紋に種々あり。杉ノ葉石。シノブ石。モミヂ石。松ノ葉石。檞ノ葉石なぞハ。紋の形によりて名く。其餘栗葉。槲葉ブナノ葉。樅葉。花栢葉。櫧葉。檜葉。朴樹葉。櫸葉。歯朶葉山欅葉等一ならず。按に明の陳継儒が偃曝談餘に曰。新安縣有王喬洞。其石皆土所成。破之木葉之形。文錯具間。文理具在。若彫刻者。（明の馮大壯天／都載同文なり。）こうし木葉石なり。

直云。明の都玄敬か遊名山記に曰。新安王喬洞在縣西二十里洞之石。皆土木所成取而破之。木葉之形。文錯具間文理具在若彫刻者。不特一石為然衆石皆然。

洞之上二木。亦皆化石。而一木復産枝葉。予見之詒而驚。終乃大駭。以為窮壌間之所未有。使人為予言。予安能信。今試以語人。亦未必不以為妄。吁何其異耶。碑言昔神仙大丹之成。土木皆化為石。其説似為得之。第不可與俗人道耳。（明の何喬遠皇明文徴ニ載る文と大同小異なり）輶軒小録ニ。木葉石ハ。中國物産ノ書冊ニモ。此事バカリハ。見當ラズ。此比皇明文徴ヲ検スルニ。都穆（玄敬）ガ遊王喬洞記ニ有云。新安王喬洞云云。此ニ依テ見レバ。中國ニハ甚珍シキヿニテ。定タル名モナシ。因テ神仙ノ所為ナド料簡ヲ付タル也。吾思フニ。天地ノ間陰陽ノ二気。融結変化シテ。柔カナル物変ジテ堅ナリ。散ズル物聚リテ塊ト成。然レハ土地ノ性ニヨリ。或ハ陰陽変化ノ時ニ因テ。柔成モノ木葉魚介ノ類ノ如キ。山土トモニ変シ。堅剛ノ石ト成ト見ヘタリといへり。予按ニ。明の陳仁錫が潜確類書曰。花石在岳州慈利之武口寨石上自然有花。如椎心牡丹。枝葉繚繞。雖精于画者莫能及。或以物撃之。花葉應手而碎。畧加拂拭其花復見。重畳非一。この花石も木葉石の事なり。

ガラス使用

鶻嘲

鶻嘲ハ。一名鶌鳩（爾雅○本草ニ作屈鳩ニ）鶻鵃（同上。○注ス。音骨嘲。）鄭樵の鷽鳩（本草）~~本綱~~阿鵴（同上 引雑俎ヲ○直按ニ。酉陽雑俎ニ赤嘴鳥亦曰阿鵴鳥といふを。山鵲の一名なり。時珍鶻嘲の一名とするハ誤まれり）鸞鷜（同上音藍呂。○直云。古説ニ十王経を引て。鸞鷜亦怪語鳴ニ別都頓宜壽ト鳴るを證とし杜鵑の事とせん。大なる誤ありし。）⊕一説ニノジコニ充るハ大なる謬なり　嘲公（元ノ東垣食物本草）冠禽（俗）清　詩の衛風ニ于嗟鳩兮。朱傳ニ云。鳩ハ鶻鳩也。似山鵲而小。短尾。青黒色。多聲。（按ニ。此説本と晋の郭璞が爾雅の注文なり。）本草綱目ニ禹錫の曰。鶻嘲南北總有。似山鵲而小。短尾青毛冠。多声。青黒色。在深林間飛翔不遠。北人呼為鸞鷜鳥。東都賦云。鶻嘲

○釈の了意が十三経直読ニ出るへの注ニ解あり。

⊕子録類纂より [illegible] 本居宣長の [illegible] 十巻ニ出たり。

春鳴是也。又時珍の曰。其目似鶻。其形似鷽。（鷽ハ山鵲也）其声啁噍。其尾屈促。其羽如繿縷。故有諸名。陸佃（埤雅）云。九鳥朝鳴曰嘲。夜鳴曰啖。此鳥喜朝鳴故也。

按ニ。此鳥和産なし。唐山ニても宋の邢昺が爾雅疏ニ。舎人曰。鶻鳩今之斑鳩。宋の鄭樵が通志畧ニ曰。鶻鳩今謂之鸜鵒なとの説あり。並ニ非なり。別ニ一種の鳥なり。本草啓蒙ニ鶻嘲ハカムリドリ。東印度ノ中アンボンノ地ニ産ス。偶荷蘭人将来ス。観物ニ供スルヿアリ。蛮名コローン冠ホーゴル（鳥ト云）。又コローン冠ドイヘ（鴿ト云）。形鴿ニ似テ甚大ナリ。眼赤ク。觜ノ形鴿ノ如ク末淡青ニメ本ハ微黒色。脚白色ニメ黒文アリ魚鱗ノ如シ。背ハ灰色微青頂ニ同色ノ毛高ク立テアミガサノ如シ。眼邉深蒼色。羽翮紫色ニ白羽雑ル。性馴ヤスク。庭樹ニテモ巣シ營ムト云。飼ニ蜀黍及粳米ヲ以テスといへり。こゝに図せるもの此なり。寛政七卯年蛮船来し鶻嘲なり。

~~古今和歌者流盧橘をタチバナと訓ス誤るり次篇ニ詳ニ載ス~~

盧橘（俗ニタチバナと訓するハ大なる誤りなり別条ニ詳にす）

盧橘ハ。往昔より枇杷或ハ金柑のことゝいふ。並ニ誤なり。按ニ。宋の王十朋が會稽三賦の注ニ曰。上林賦ニ曰。

盧橘夏熟。黄甘橙楱。盧黒色也。盧橘出建安。有為枇杷之説者。既言盧橘夏熟。又言枇杷橪柹。豈用之重複邪。廣州記。盧橘皮厚。大如柑。酢多。至夏熟。土人呼為壺橘。則非枇杷矣。明の楊升菴文集に曰。上林賦。盧橘夏熟。注不言何物。近注唐詩三體者。特為枇杷。世皆宗其説。然予観上林賦。又有枇杷橪柹之文。不應重出也。偶閲呉録云。朱光禄為建安郡。中庭有橘。冬月樹上覆裹之。至明年。夏色変青黒。味絶美。此即盧橘。盧黒也。此説近是。（直按に。元の陶九成が輟耕録にも此説あり）こゝろ得ふて。枇杷又金柑にあらざることを志るべし。盧橘ハ。一名壺橘（上に見ゆ）夏橘（本草引廣州記）給客橙（魏王花木志）和名夏蜜柑といふ。形御柑に似て圓く。冬月尚緑にして味酢し。春に至て黄色となる。故に本州有田郡湯浅にて。春蜜柑ともいふ。夏に至れバ。其皮微し黒色を帯て煤をつけたるが如し。故に盧橘といふ。香味甘美なり。有田郡處々に多く産す。

直按に。盧橘ハ。実に柑の類なり。夏月熟する時も其味乳柑に類す。村瀬敬之（栲亭）が南海包譜に曰。盧橘ハ是柑ノ類也。而曰之橘。猶金柑有金橘之名。不嫌同類互呼也。

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

赤鯽

赤ブナと。又ヒブナといふ。本藩岡の谷一士家は庭池中に自然生あり。又本州名草郡藤白山の溪流にても稀に得ることあり。初生は常の鯽魚と同じ。又少し異なる處あるにや。初生の時より赤ブナに化する品を識別する人あり。三四寸の時。紅黄色に変ずること金魚のごとし。嚴州府志に鯽有紅といふこれなり。又淵鑑類函に。宋の沈存中が夢溪筆談を引て曰。西湖南屛山興教寺池。有鯽十餘尾。金色。道人齋餘。爭侍檻。投餅餌為戲。故東坡詩に。我識南屛金鯽魚。これは金鯽魚を赤ブナに充る說あり。恐くは非なり。深くこれを考ふるに。金魚の鯽様のものにして。興化府志の金鯽と同物なるべし。直按に。佐久間洞巖の奥羽觀迹聞老志に。金鯽。所出于志田郡大崎沼。自古為佳品。其長尺。今其沼水涸。而為田野。不出此魚。尤可惜といふは。これ何魚か詳ならず。又先年東都にて筑前の人に聞く。鞍手郡若宮川に赤色の鯽を産す。既に貝原の風土記にも載せりといへり。予筑前續風土記を閲するに。土産考

の鯽の下に。ヱブナアリ。小ニシテ赤シとあり。これをいふなるべし。この称は鰱魚の事にて。赤ブナとは別なり。

海豆芽

目冠者介なり。本邦泥海に多く産す。備前にて乙女介（紅䲙）と同名なし。またオトカヒといふ。蚌類にして。其殻指甲のごとく長く。大なるは二寸許。小なるは一寸許。薄く脆くして緑色。或は淡褐なり。小児好テ集テ其殻数斤ヲ以テ作テ梅花様ヲ翫ㇾ之（食療正要）。肉洁白にして外に出て鼠尾のごとし。肉は大豆に似たり。筑前備前にては其肉を乾し。或は殻と共に塩蔵にして遠くに寄す。大和本草に其肉甘美如ㇾ竹蟶ノ。竹蟶（原本作ㇾ蟶。今改ㇾ之）其尾モ食ス。有ㇾ毒。食ㇾ之者患ニ発斑ヲ。中ル其毒ニ者紅花ヲ煎服スといへり。怡顔斎の介品に。若シ鮮ケカラザル者ヲ食ヘバ微毒有リ。脚腿ノ間ニ瘡ヲ生ズ。目冠者ノ状ノ如シ。故ニ名ク。然レドモ両三日ヲ経レバ。醫セズシテ愈ユといへり。按に漳州府志に曰。江桃。緑殻白尾。其形チ如ㇾ船桃ノ。故ニ名ク。泉州郡志ニ以ㇾ形如ㇾ指甲ニ。名ㇾ指甲螺ト。直按に。（閩書に江桃は即指甲之大者といふ。大小にて名を別けたり。）明の陳懋仁が泉南雑志に

ガラス使用

曰。北方謂泥磚曰土坯。晋江有介属亦曰土坯。緑殻白尾。其旁有毛。臺湾府志ニ曰。海豆芽。似蜆而大。形扁。殻緑。吐尾如豆芽。故名。一曰塗杯　此等皆目冠者介なり

直梅ニ。嶺南雑記ニ曰。水豆芽。蚌類也。鮮時殻中有一肉粒如牙箸。醃之則会。小如豌豆。これ亦同物なり。

大茴香

大茴香。一名舶茴香。又八角茴香。又畧して角茴香と云。今蛮舶来多し。尤和産なし。古説ニ。莽草実を以て大茴香ニ充るハ大なる誤なり。大小茴香の分別三説あり。本草蒔蘿ノ一名小茴香也とあるハ。蒔蘿を絲葉茴香とし形小なるをもつて。絲葉茴香を大茴香とせる説なり。又時珍の説ニ。大（食物本草作形）如麦粒。軽而有細稜。俗呼為大茴香。今惟以寧夏出者為（此一字本ニ無）第一ト。其他處小者。謂之小茴香といふハ。これ一種の中ニて。粒の大小によりて分つなり。此二説ハとらず。今ハ清の郭章宜が本草匯の説ニ従ふ。其文ニ。形如麦粒為小茴香。性温宜入食料。形如栢實裂成八瓣者為大茴香。性熱損目。不宜入食料といへり。一説ニ。清の張璐玉が醫通の本經逢原ニ。八角茴香即懐香也とあるを以て。本草香木類ニ載る懐香の実とす。蘭山先生も。此説を是とせられけりしに。先年予先生の門ニ遊びて東都ニゐましし比。桂川氏蘭書ウエインマン中ニ載る大茴香の図を以て先生ニ示れ。これまて璐

ガラス使用

詩疏伝説景山巻　呉陸璣字元恪
四庫全書簡明目録　呉陸璣生於三国去古
未遠於所引諸物今昔異名者多能
得其梗概故孔穎達正義亦多据其書

此文語二篇在七之部清庵先生自考證有之處纂之
未能見其書也其餘若初篇二冊既刻出年于江戸書也
西土諸書云壹弘之七人七人海内存者江戸医学館之蔵板
之積之待而清而已被[illegible]人之[illegible]何年之
若可[illegible]後之医学館者在[illegible]存書之中之紀為
医学館蔵板之刷[illegible]

桃洞先生手記

ガラス使用

玉の説も誤まれることを識る。予も其席にありてそるゝと聞えたり。よりて今茲に謄写し出る。蛮名アニイシといふ者とふ今蘭流の医。常に茴香をア子イシといふ。直樽に。訳鍵の附録大西薬名に小茴香をア子イス大茴香をステルア子イスと作り

暖皮

本草綱目時珍の曰。樺木。其皮厚而軽虚軟柔。皮匠家用襯鞾裏。及為刀靶之類。謂之暖皮。胡人尤重之。

建昌縣志に曰。樺皮有紫黒斑。用以裹弓。謂之暖皮。

畿輔通志に曰。樺似山桃。皮上有紫黒花勻者。可裹弓。皮之厚者為煖木。可鑲器物。大清一統志の奉天府土産の下に曰。樺似山桃。皮有紫黒花。可裹弓及鞍韂諸物。諸山中。及諸尼江混同江之間最多。樺は和名カバ。信濃にてクサバクラといふ。葉互生る。夏月一寸許の穂あり。白花を開く。後又一寸許の毬あり。薄き鱗甲重りて杉毬の如し。樹皮白して黒斑あり。好事の者は全皮をもりて承塵とす。皮は横理ありて櫻皮に同じ。他木皮の縦理あるに異なり。故に竪に切て全皮を横に剥取べし。皮を剥去ば其樹愈長ず。其皮外の粗皮を去るときハ。幾重にも薄

ガラス使用

くへげ。浅褐紅にして白斑あり。甲信の土人採て色紙短冊に造り。或ハ書の表紙となし。又笠に作り。又物を裹むに竹籜に代ふ。又此皮膏多くして。能燃るゆゑ。雨中に松明に造り。或ハ烏頭網用ひて炬火に代ふ。方言鸕松明といふ。此木品類多く。葉形も一ならず。（予日光山中ニ）て所見凡三品。其は葉形異なり。一は葉の本左右に開き。三角草此如し。一は少し長くありて樸樹の葉に似て短し。一は常州足尾山の方言サイハダといふ。葉大にして圓く細鋸歯あり。本にシナノ木の如き凹あり。木曽山中にてタケカンバと云。又加賀にハ。ヒカンバ。茶カンバ。赤カンバ。黒カンバの種あり。ヒカンバは。白カンバをいふ。皆其樹皮緊薄にして柔軟ならず。今弓靶に用なり。

ゆる暖皮ハ。潔白柔厚にして韋の如し。本草及諸書に。暖皮を以て樺皮とするもの。本邦の樺皮。唐山の樺皮も同からざるに似たり。然れども曾て清舶載来る樺皮を見るに。緊薄にしてカバの皮と全く同じ。よりて丹羽昌伯ハ。暖皮ハ樺皮にあらず。黄栢皮なりといへり。（直按）に。丹羽氏名ハ貞機と云。若水の門人也。庶物類纂續編五百五十三巻を著す。樺の條に曰。時珍所謂。胡人所重之暖皮者。黄栢皮而恐非此物。易州志云。黄栢裏皮謂之暖皮是也。享保之末。船商上清朝之短弓。云此靶用黄栢皮巻之。虚浮柔軟。而掌中有温暖之氣。清人謂之暖皮。後官命工。用本邦之黄栢皮巻弓靶。柔孚不及異邦之産。本邦之樺皮。緊薄而不柔厚。非當有暖皮之称者。然而太平御覧引拾遺録云。汾州汾陽宮南外平林。率是大樺木。高

ガラス使用

百餘尺。取皮覆舎善。北地之樺皮。有柔厚如黄栢皮者否や未詳矣。又盛京通志。訓蒙字會並に黄栢皮を暖木皮と名くること載る。又予先年對州の人に聞く。朝鮮には黄栢は暖皮を生ずと云り。これ前説によりて傳會せるものか實否志るべからず。本邦黄栢皮に稀に暖皮の如く柔なるもあり。生ずることは稀なり。されど僅四五分の大さにして弓靶を巻べきもの小なりし」又嘗て聞く。木曽山中に。山カツタイ。一名漢木といふものなり。土人血症の薬とす。大に効ありと。其皮軟爛。本草諸書に所説の樺皮。一名暖皮なるものと相符す。故に稲若水は樺皮をもつて暖皮とす。蓋甲州産は皮剛堅。此皮は柔爛なるを異なりとすといへり。此説理あるに似たり。然ども予其漢木と云ものは何の形をなせるをしらざれば。果して樺なるや否をしらず。」又聞く。寛政十二庚申の年信州高井郡奥山田深山中にて。十囲許の枯松を。樵者折寄て斫しに。皮下に軟皮あり。各好に随ふて。荷包等に作る。其地須坂に隷す。大夫某求得て琴の袋とすといへり。予其後東都にて其品を目撃す。舶来の暖皮と別なし」（直按に。信州松本には。唯一処）

の栗林にて暖皮を得る。他処絶てなしといふ乚又越後高田遍にてハ。栗及びブナノ木に暖皮を生ずといふ。又和州吉野奥にハ。松樹と櫻樹に多く暖皮を生ずれども。舶来より其皮薄く其色淡褐にして下品なり。又日光山中にハ。落葉松に生ずといふ。一説に。これ乚ハ蝦夷のエブリコと同物といふ。直按に。エブリコは。大槻玄澤の六物新志に詳かなり。蘭山先生の臺延小牘に。廣群芳譜を引て。落葉松寄生といふ。暖皮と別物なり。日光山中のものは。エブリコを誤り指にや知るべからず。又長谷川氏が飛州志には。縦に生ずといへり。直云。近年乚飛驛三浦山に産する。方言木ノ綿と呼もの。長さ五寸許。幅四寸許に切とるこれを得たり。厚さハ四分許にして又一分許の処もあり。白色柔軟。帯と同形にして。舶来の暖皮と一般なり。火中に投いるれば。櫟木の臭あり。これをば白ヒツノ木は産すといへり。秋里籬島が木曽名所図会に。書白樅。俗これを白比曽と名くとあり。又

文政紀元の春。熊野鹽見峠の東芝村の山神。叢林中の大柯樹朽仆る。其中に暖皮あり。黄白色にして厚さ二三分。常と形相似たり。方言木ブスマといふ。又土人の説に。煎服して疝痛を治す。此樹に限らず。稀に喬木の朽仆るより出る事ありといふ乚以上の諸説を考れば。暖皮ハ。總て諸木ともに枯るゝ裏皮に。天然に生ずるものにして。尋常の皮にはあらざるべし。唐山にては。櫟木黄蘗木に多く生ずときこゆ。或ハ樺皮。或ハ黄蘗皮と一物に限るハ偏説なり。

天梅

天梅ミ。又天ノ梅。（九州）又天粉梅。（加州）テンリウバイ　ヤシ
ヤビシヤク（熊野）キウメ（土州）シヤウイタドリ（同ト）ヤシホ
（本州龍神）日光山及熊野山中ニ多し。木上ニ寄生ス。茎葉
並ニ甚木ヒヨドリ上戸ニ似たり。根古きもの多く叢
生ス。高さ尺餘。夏月葉の間ニ花あり。五瓣白色宛も梅
花ニ似たり。花後実あり。長さ五分許。外ニ毛刺あり。蒼
耳実の如し。熟して赤く味酸し。小兒採り食ふ。熊野ニ
て茎葉ニも不用ひて諸乳汁を通じ。淋疾を治すと云。
本草薬名備考ニ曰婦人帯下ニ用テ甚ダ効アリとあり

江村如圭の詩経名物辨解ニ。蔦ハ類ナリと云ヱ。按ニ。
宋の鄭樵が爾雅の寓木宛童を注して。樹上ノ寄生木也。
有二種。一種葉圓名ッ蔦」といふ是なり。

鼯鼠　即石虎　附　鼯鼠

今蝦夷ニ産する鼯鼠といふ者あり。其皮を多く来る。
形鼠ニ似て頭扁く大さ尺許。又五寸餘のものもあり。
全身淡黄色ニして黒褐の斑文あり。腹白し。其尾ハ長
くして黄白黒の毛まじはりたるを爾雅の鼯鼠ニ充
るハ非なり。明の王一正が事物紺珠ニ。石虎似テ猫而小ク

毛斑類鼫と云ふ是なり。蘭山翁が清文鑑の華金鼠を采鼠といへり。予清文鑑を閲するに。華金鼠の注韃字をてらさゞれハ是非志るべからず。

の張鼎思の瑯琊
代醉編并ニ

直按ニ。明の劉昌が懸笥瑣探（明沈節甫が紀録彙編中の本懸を縣ニ作る）ニ。唐書の盧藏用が傳を引て曰。盧藏用弟虚若。多才博学。隴西辛怡諫為職方ニ有下獲二異鼠一者上。豹首虎文。（本書作豹首虎臆）大如拳。怡諫謂之鼮鼠而賦之。若虚曰非也。此許慎所謂鼮鼠豹文而形小。（本書豹文下作豹文）一坐驚服。予在虞衡時。四川貢諸獣皮中ニ有石鼫者。似猫而小。似鼠而大。形全類虎。其色黄而斑黒。正類貂文。

○今の説文を考ふに鼨豹文鼠也職戎切とありて貂文而形小の字無し

豈所謂鼮鼠而俗謂之石鼫耶。と此説によりて石鼫鼮鼫同物なり。○直又按ニ。本草綱目鼠の附録ニ。鼮鼠を載せて。音終。郭璞云。其大如拳。其文如豹。漢武帝曾獲得以問終軍者といへり。今爾雅を考るに。鼮鼠（郭璞注ニ云。未詳。音終。）豹文鼮鼠（郭璞注ニ云。鼠文彩如豹者。漢武帝時。得此鼠。孝廉郎終軍知之。賜絹百匹。鼮ハ音廷。）とあり。時珍ハ爾雅の鼮鼠鼮鼠並べ出せどまりて。鼮鼠を出して鼮鼠の注を誤り引き。唐書の若虚が説の大如拳の字を加へしとミえたり。（康熙字典鼮字注云。）按ニ爾雅本文。鼮鼠豹文鼮鼠。郭璞鼮注未詳。鼮注鼠文彩如豹者。許慎鼮註。豹文鼠。豹文ノ二字。或ハ上ニ屬。或ハ下ニ屬ス

ガラス使用

未ㇾ知孰是いづを。鼫鼠ハ。郭注に未ㇾ詳ナラとはいへど。若虚の説にありて鳴鼠に充べし。鼫鼠ハ黒白の斑鼠にしてマダラ鼠又玳瑁鼠といふと述ありさて。こゝに漢武帝得て終軍に問ふの事ハ。郭璞の誤りなり。既に邢昺が爾雅ノ疏に。漢書ニ云。終軍字ハ子雲。濟南人也。少メ好ニ學ヲ。以テ辯博能ツ屬ル文ヲ。初入ㇾ関ニ棄ㇾ繻ヲ而去ル。至テ長安ニ上書メ為ル謁者給事中ト。使ニ南越ニ為ニ呂嘉ガ所ㇾ殺サ。死スル時年二十餘。故ニ世號ス之ヲ終童ト。武帝嘗テ得ニ豹文ノ鼠ヲ。終軍以テ爾雅ヲ辯ズ其ノ名ヲ。故ニ受ク賜ヲ也といふも。郭氏の誤りを享くる也。前漢書終軍傳に。此文を載たれど。武帝嘗以下の文字なし。こゝにハ宋の王楙が野客叢書に辯せり。其文に曰。郭璞注ニ爾雅ヲ謂ニ豹文鼫鼠ヲ。漢ノ武帝ノ時得ウ此ヲ。孝廉郎終軍知ル之ヲ。賜フ絹百匹ヲ。其後如キ崔偓佺劉士玄之徒。皆知ニ其ノ説ヲ。唐ノ藝文ノ類聚ニ亦メ云。終軍知ル豹文鼫鼠ヲ。武帝賜フ絹百匹ヲ。余考ルニ前漢諸書ヲ。不ㇾ聞ニ終軍有ルコトヲ此ノ事。讀ニ後漢竇攸家傳ヲ。光武宴ス百僚ヲ於雲臺ニ。得タリ豹文之鼠ヲ。問フ群臣ニ。莫ㇾ知ル之ヲ。惟竇攸曰ク。此鼫鼠也。詔メ問フ所ㇾ出ル。曰ク見ル爾雅ニ。驗ニ之ヲ果メ然リ。賜フ絹百匹ヲ。詔メ公卿ノ子弟ニ。就テ攸ニ學フ爾雅ヲ。是ヲ以テ徐陵カ謝啓ニ曰。雖ニ賈逵カ之頌ニ神爵ヲ

攸之對䶮胤方具寵錫。獨有光前。得非即此事而誤以爲終軍乎。轄虞三輔決録亦謂竇攸とあり。又正字通にも辨あり。

紫陽花 附八仙花

白氏文集に紫陽花の詩に曰。何年植向仙壇上。早晩移栽到梵家。雖在人間人不識。與君名作紫陽花。注に招賢寺有山花一樹。無人知名。色紫氣香。芳麗可愛。頗類仙物。因以紫陽花名之。（宋葛常之韻語陽秋に曰。有山花。色紫氣香。穠麗可愛。人莫知其名。白樂天標其名曰紫陽花。紀之以詩と）彙苑詳註に曰。杭州隱靈山桂。[illegible]花紫清香可愛。白樂天號之爲紫陽花。（淵鑑類函に南部新書（宋錢易著）を引て曰。招賢寺僧植桂。香紫可愛。郡守白公號爲紫陽花。）これ紫花の木樨にして。唐の李徳裕か平泉草木記に紫桂といふ。本邦に産せし即丹桂の屬なり。和名鈔に。紫陽花和名安豆佐爲といへるハ誤りも甚しきものなり。アツサヰぞまたアヂサヰともいふ。蘭山翁ハ閩書の聚八仙。秘傳花鏡の八仙花をアヂサヰに充る。今此説に從ふ

直按にアヂサヰハ。萬葉集に味狹藍。或ハ安治佐爲

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3,附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

由書り。仙覚萬葉集註釈に。あぢさゐとハ。あぢりふ流也とあるハ解がたし。又釈昌住が新撰字鏡に云。蒩（止毛久佐。又安知左井）と此蒩の字ハ康煕字典に。蒩集韻毗連切。音娗。類篇ニ蒩縷草名由なり。正字通にハ。蔘の字の譌なりといへり。蔘を爾雅に。蔜蔘縷とありて。蘩縷（ハコベラ）の事なり。何の書によりて。アヂサヰに蒩の字を用ひしや詳ならず。又四ヒラノ花といふハ。古今和歌六帖に。あかねさす。ひるはこちたし。あぢさゐの花のよひらに。あひ見てしかな。此歌の讀（人未考）といふ歌より出るや。又今川了俊の言塵集に。はとふり草とハ。あぢさい（ゐに作るべし）の一名也とあるハうけがたし。

○唐山にて八仙花を以て瓊花に充る説あり。誤まれること。五雑組及び格致鏡原に辨ぜり。○大和本草に古説に従ふて。紫陽花をアヂサイに充る。故に聚八仙をヤブテマリとし。非なりヤブデマリ也。典籍便覧に載る蝴蝶樹なり。

桐洞いし巻之二終

ガラス使用

桃洞遺筆巻之三

紀藩（華山）　小原八三郎源良直　録

椿《きやんちん》　附 山茶花《つばき》

椿《ちやん》。音丑（倫反）。杶（禹貢）。橁（左傳）。櫄（説文）。櫄（字彙）。皆同字《ことなおなじじ》なり。和名《わめい》玉《たま》ツバキ。又キヤンチン。又チヤンチンといふ。本邦《ほんぱう》もとより多《おほ》きをみれども。昔人識《むかしひとし》らずして。唐山《たうざん》より種《たね》を取《とり》よせ。黄蘗山《わうばくさん》に栽《うゑ》しといふ。木高《きかう》く聳《そび》え。木理《きめ》細膩《こまか》にして白

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

實皮に縦紋あり。樹梢枝を繁く分ち春新葉を生じ漆の葉に似て長し。雌木は五月長穗をなし。南天竹の花に似て白色なり。秋に至り実熟して形連翹に似て圓長。自ら堅に裂て。松実の如きもの風に従ひて飛ぶ。本草綱目に。此莢形長く鳳眼に似るゆゑ。鳳眼草といふとあり」。山茶花と。伊藤長胤の秉燭譚に曰。椿ヲツバキト訓ズルハ本ヨリ誤レリ。莊子ニ大椿ノコトアレド。後世其花ヲ称スルコトヲキカズ。近年平井徳建氏ナド本草ヲ検テ云。山茶花ト云モノ。即日本ノツバキ也ト。其後物産ノ説詳ニシテ。山茶花タルコト愈明ナリとあり。是説従ふべし。山茶花ハ品類甚多し。花史左編。群芳譜。秘傳花鏡等に詳なり。本邦にて椿をツバキと訓ずるハ。其誤て来ること久し。唐山にも知りて。草木薬方雑記に。日本山茶花其國名為椿。不名以山茶也といひ。其下に。白者以白玉。最白玉下種。花大色白而香。香加我里白百合花之香開放于二三月。次則唐茗也。白栱也。在高根則又其次也。至于白菊六角之類。花朶小不取焉。紅者以中為最。花大而香。加賀牡丹。甚佳。花色大紅。加牡丹。花瓣

邊或有吐露白邊者。次則大紅牡丹。與渡守。春日。倶妙。雜色最佳者莫加有川。其白上有紅色加雲。朝霞。其色紅。有白點者。亂柏子亦然。有薄衣。色如醉楊妃者。有大江山。一本有三四色者。有三國。一本乃三色者。有玉簾。一本四五色者。尚有浦山開。荒浪。鳴戸。關戸。金水引。皆為上種。有加平牡丹。唐絲。鏡山。唐椿。山海牡丹諸種。皆其下者。共有五百種。有一種天下奇聞花朶色百様。其國内亦少。不可得者。有一種名五寸といへり。（此下に植様接木の法ものせたれどこゝに略之）又書紀に。天武天皇十三年。三月癸未朔庚寅。吉野人。宇閉直弓。貢白海石榴とあり。この椿を白ツバキと訓をつけたり。和名鈔に云。海石榴和名豆波木とあり。共に大なる誤りなり。海石榴は朝鮮ガツロなり。直按に。或説に海石榴をツバキに充ること非ず。即山茶花の一種花小にして。大さ海石榴花の如く。蒂は青くして。筒瓣をなれども異なる。俗にワビスケと名く。漢名海榴茶に。明の楊升菴文集なり。海紅花といふ。これ海榴茶を海石榴と遂に混じて誤を出るなりといふ。志のるべし。又藝花譜の茶梅花はサザンクワなり。この椿を誤

後編
ミノ

呈て。ツバキに充る説もあり。

交喙鳥

此鳥冬月多し。形大さもイツムギといふ小鳥に似て。頭背蒼赤色。腹臆赤紫色なり。嘴青くして曲て齟齬へり。故に俗は世の相違ふを此を呼ていすかのはしと云。脚は黒色なり。古説に明の王圻が三才図會に載る。鋏觜に充るは誤りなり。按に。明の真逸が農田餘話に曰。予早年。深秋多見林木間有異禽如翠羽之類。斑絑可愛。其状不一。有喙若剪股相交者。或人云。皆是海南所産。此亦乘地気自南而北。自兵興後三年余年。未嘗見之とあり。即是なり。

水仙梅

水仙梅は。単瓣白色にして形最大なり。六瓣なるをもて六瓣梅ともいふ。其香尤勝れり。俗に其花六瓣ゆゑに。水仙梅と名くと。水仙花単葉の者は。六瓣也。本草に五出といふは何や論あり。或は。其香水仙花に似るゆゑ名くと。直按に。此説非なり。水仙花の香とは異なり。或は。花純白にして後微し淡紅を帯るゆゑに。酔仙梅と名くなどいへり。按に。広東新語の説によれば。水先

ガラス使用

出字音綴見于
丹鉛録及群芳譜

梅も書く可なるべし。其文に曰。瓊之州比年梅花六出。予ガ謂フ梅花ハ五出スル者也。五ハ陽数也。冬至一陽始テ復ス。梅即チ吐ツ花ヲ。淂ル陽之先ヲ者也。今六ニ其出ヅ。則淂陰数ヲ矣。蓋シ以テ地気ヲ而凝苦メル於厳寒ニ。故ニ不シテ用ヒ其五ヲ而用ユ六ヲ。同キ於雪花ニ也。以テ梅花ヲ為シ體ト以テ雪花ヲ為ス用ト。使テ人ヲ見テ以為ラク雪花ハ則チ梅也。以為梅ハ則チ雪花也。人見テ其六ヲ。而不見其五ヲ。其五在リ六ノ之中ニ。猶ホ河図之五在ルガ十中ニ也。且也河図之一生ス水ヲ。梅ハ淂水気之先ヲ。故ニ花於テ冬至ニ。与雪同スル時ヲ。雪ハ者水ノ之気ノ所ロ凝ル。梅ハ者水ノ之形チ所ロ結ル。其卦皆ナ為ル坎ト。子ハ為ル水ト。子ハ在テ天ニ而未タ至ラ乎地ニ。而先凝テ為ル雪ト。先ツ天之水ニ也。水在テ地ニ而未タ上ラ乎天ニ。而先ツ発テ為ル梅花ト。先ツ地之水ニ也。水ノ之数ハ六ツ。寒極則チ雪花与梅。皆六ニ其出ヲ。応ズル其数ニ也。北方地寒シ。以テ煖ヲ為祥ト。南方地煖ニ。以テ寒ヲ為祥ト。瓊州之梅早キハ以テ煖ヲ也。其六出ナルハ以テ寒ヲ也。是レ乃チ祥也といへり。又孝豊県志に。鄭南ノ十八景。張九皐ガ郭笑ニ尋ル梅ヲ詩の注に。郭笑山ノ梅花六出といへり。いづれも本邦にても唐山にても。南方に多く産るところ也。本州にハ處々にてこれあり。

直指に。今種樹家に多くある六瓣梅ハ。紅白とも二種あり。皆單瓣にして。形梅より小く。其瓣細くして先

尖り毎瓣の間退きて重らざるものを。退藥梅とい
ひ。又軒端梅といふ。千葉にして形ち小く凹みし
て。外のはなびら赤く。内は白くして紅点あり。
其瓣圓くして先尖らず。瓣重るものを。西行梅といふ
て別なり。これ二種は。稀に五瓣七瓣のものも雑り
開く。真の六瓣梅はあらず。

蓑衣虫

清少納言は枕の草紙にいはく。みのむしいとあはれな
なり。鬼のうみたりければ。おやににて。これもおそろし
き心ちぞあらんとて。おや乃あやしき衣ひききせて。
宸翰

此ノ下ニ注ヲ入ベシ
▲又宗碩の藻塩草に
蓑虫の歌五首あり
こゝに略す

本、杉本などに。はやしき衣今秋風ふかんおりぞこ
をひき、せふつろきり。
んずる。まてよとおひてにげていぬるもしらず風
はおときゝしりて。八月ばかりになればちゝよ〳〵と
はかなげになく。いみじくあはれなり。又夫木和歌
抄に。寂蓮の歌あり「契りけん。親はこゝろもしらず
して。秋かぜたのむ。みのむしのこゑ。▲按に蓑虫に二
種あり。一種は初木葉の芽出しにつき食ひ葉の筋を
残し。口より絲を吐き。身を中に綴り絡ふ。此の如くし
て多く重ね巣をつくる。虫成長して大さ一寸ばかり。

木の枝に附て下に垂る。後羽化して蝶となる。此種真物なり。一種其形相似て木の枝につかず地をはふ。真物ハ一方より頭を出し。此種ハ首尾より出歩ス。同類別種なりL さて蓑虫ハ唐山にて諸名あり。晋の崔豹が古今注に曰。結草虫。一名結幕。好於草末折屈草葉以為巣窟処於有之。宋の馬縞が中華（古今注同文なり）宋の蘇軾が物類相感志に曰。芝蔴棵掛樹上無蓑衣虫。採蘭雑志に曰。結草虫。一名木螺。一名蓑衣丈人。以上ミな同物なり。直按に。蓑虫ハ枕草紙より古く。宇津保物語にミえたり。梅の花笠の巻に云。上略 あて宮に給ひて。ミのむしつける花おゝく出給ひて。そせぢしゐふうさきせるそれどもそてゝかくすきたまふ。〽このくたふ。みのさの山の。ミのむしハ。きみのぬるをや。ぬるといふらん。とあり

治馬蜞噬人

清の韓則愈が雁山雑記に云。雁山春夏多馬蜞。毒物善噬人流血不止。以焼竹葉塗創血立止。今淡竹葉を焼て試るに極て効ありL 馬蜞ハ一名馬蛭（蛭字。證類本草に音質。事物紺珠に音只。）

廣韻ニ和名ウマビル。古名又ウマビル今名ヒといふ。梅天ニ多
音釜。
く出る。大なるハ三四寸許なり。

姥芽櫧　附圓珠櫧

夫木和歌鈔ニ為家卿の歌「冬くれば霜をいたゞくうばめの木。おいのすがたやいとゞみゆらんといふ是なり。又略してバメカシともバメともいふ。人家庭ニ栽て生垣として舍す。漢名詳ならず。圓葉櫧の名あれども。漢名ハ詳ならず。文政辛巳の春正月。熊野浦へ。江南の蘇州府崇明縣の商舶漂流し来る。其舶中の王壽珍といへる者あり。此樹を尋しに。刺櫧と答へり。直云。先年或人予ニ語りて。圓珠櫧といふもの也。馬目櫧ハよく的當せり。圓葉櫧ハ圓珠櫧の誤なるべきか。されども其出書を忘れたりといへり。按ニ明の何孟春が餘冬序録の外篇ニ。圓珠櫧をのす。其文ニ。櫧樹歳結子。其子小者。小於榛。味如之。大者大如榛。而味苦。土人取為果実。謂小実者為圓珠櫧。大者為苦珠櫧。以此分二種。其材固無異也といへり。これハ櫧の小実ニして食ふべきものなり。馬目櫧ハ是ならん。尚後

ガラス使用

廣韻ニ音釜。和名ウマビル。古名又クマビル今名といふ。梅天ニ多際ニ多く植る。熊野山中ニハ自生多し。大なるその高さ數丈ニ至る。きりて薪とし上品なり。九州ニてウバシバといふ。櫧の属ニして葉厚く長さ一寸許。楷ニして鋸歯あり。對生す。冬凋まず。花ハ馬酔木の如く。又櫧の花ニ似て黄穂を成し。後ニ櫧の如き実を結ぶ。小児採て火ニ煨して食ふ。漢名詳ならず。圓葉櫧の名あれども。漢名ニあらず。文政辛巳の春正月。熊野浦へ江南の蘇州府崇明縣の商舶漂流し来る。其舶中の王壽

珍といへるものなり。此樹を尋しニ刺楢を答へり。直云。先年或人予ニ語りて。圓珠櫧といふもの馬目櫧ニよく的當す。圓葉櫧ハ圓珠櫧の誤なるべきか。されど其出書を忘却せりといへり。按ニ明の何孟春が餘冬序錄の外篇ニ。円珠櫧をのす。其文ニ。櫧樹歳結子。其子小者。小於榛。味如之。大者大如榛。而味苦。土人取為果実。謂小実者為圓珠櫧。大者為若珠櫧。以此分二種。其材固無異也といへり。此種ハ櫧の小実ニして食ふべきものなり。馬目櫧ニハ劣らず。尚後

ガラス使用

考をまつ

食巖虫

本州熊野浦神浦海邊石上に巣をつくる。土人石食蟲といふ。形白膜子衣の如くにして小なり。其中に大さ二分許の虫あり。形圓扁にして八足。前髭長し。全身淡鼠色なり。土人此説に。此虫たゞ此石をのミ喰ふといふ。其石も軟にして鼠色なり。石面に虫の喰し跡ある。（明の陶望齢か游台宕路程に。石根或如虫蝕といふことを載す。此と別なるべし。）予此石を鉄来りて彼虫を入れ畜ふるに。日久しくして尚活動す。顕微鏡

を用ひて。此蟲を寫出すもあり。右に圖するが如し。漢名いまだ考へ得ず。

名護蘭

琉球より來る。名護嶽に產するをもつて名く。今花戸に多し。生樹の枝幹へ着。棕櫚の毛などにて結つけ置ば。皮へ根を纏ひ蔓るものなり。又杪欏へ着て能生ず。苗の高さ七八寸。茎棒蘭に似て巨く葉ハ藤槵子の葉に似て長く滑なり。五六月一幹を抽て梢に花を開く。七八朶攅生して。風蘭の花に似たり。其色蒼白なり。清の徐葆光が中山傳信録に。名護嶽山上ニ有萬松院。出ス蘭ヲ。葉如ㇾ桂。抽ㇾ箭如ㇾ蕙。攅ㇾ花如ㇾ蘭。香更烈。稱ス二名護蘭ト一といふ是なり。古說に天台山方外志の長生草。一名仙人指甲蘭を以て名護蘭に充るハ穏ならじ。一種花姑に大葉の名護蘭といふものあり。花葉とも平常品より大なり。按に。琉嶌畧記に。壽蘭葉ハ名護蘭ノ如ニシテ大ク。幹長ク。花モ名護蘭ヨリハ蕋長ク咲キ。香高シといふと同物なるべし。

直云。山闇恭安の本草正偽に名護蘭出雲州ニ多ク産スといふ。其実否を

あをさば

青魚　附二親魚

本草綱目ニ青魚。（邵武府志ニ曰。青古作ル鯖ニ）頌曰。生ス江湖ノ間ニ。南方多ク有。北地時或有リ之。取ルニ無シ時。似テ鯇ニ而背正青色。（明の鄺露が赤雅ニ曰。色青黒。大者百餘斤。）南人多ク以テ作ル鮓ニ。古人所ノ謂ル五侯鯖即チ此。（五侯鯖ハ。漢の婁護が西京雑記ニ出る。）其頭中ノ枕骨。蒸テ令メ気通シ曝乾ス。状如シ琥珀ノ。荊楚ノ人煑拍テ作ル酒器梳篦ニ。甚佳ニ。舊注ニ言ク。可シ代ル琥珀ニ者非也とあり。此魚何物か詳ならず。本邦にて。サバ杯ことを。青魚或ハ鯖と書ス。故ニ和名鈔ニ鯖音青。和名阿乎佐波といひ。

本草和名ニ。鯖ハ組経ノ反。和名佐波といふ。倶ニ非なり。サバなり。譯傳雜字簿ニ。青花魚とあり（直云。サバニ。鯖サバ、叫サバ、潮サバの異）あり。予南海魚譜を著して詳ニせしが。こゝにのせず。青魚同名あり。朝鮮ニては。カドを青魚といふ。故ニ東醫寶鑑ニ。青魚を載て。頌ハ説を引き。其下ニ。非ス我國之青魚ニ也といへり。カドハ常陸國誌ニ。河海交ル処多ク出といひ。採薬使記ニ。此魚アツマル所沫ヲ吹テ水面ニ浮ム。雪ノ降タルガ如シ。網ヲ以テ是ヲ捕ルと。松井玄蕃いへり。本草啓蒙ニ云。カドハ。一名ニシン、高麗イワシ（筑前）セガイ（朝鮮）房總常奥羽

州。妹ニ南部津軽蝦夷ニ多シ。九十月ヨリ春二三月ニ至マデ採ル。春採者ヲ良トス。冬採者ハ油ナシ。大ナル者ハ一二尺。形鯔魚ニ似テ扁ク。又青花魚ニ似テ眼大ニメ赤ク。夜光アリ。鱗薄軟ニメ落易シ。捕レバ速ニ自ラ脱ス。色青シテ光アリ。肉ハ脆ク美ニメ紅色ヲ帯ブ。細刺多クメ鰮魚ノ如シ。炙リ食メ味鰮魚ニ勝レリ。或ハ鮓ト為ス。或ハ糟藏ス。南部方言ニカドノ脊肉ノミ乾タルヲニシント云。全ク開テ乾タルヲハニシト云。味美ナリ。津軽ニテハ生者ヲニシント云。冬ニシン春ニ

シンノ名アリ。脊肉ノミ乾タルヲ磨ニシント云。全ク乾タル者ハ京都ニ来ラズ。脊肉ノ乾タル者ハ多ク来ル。賤民ノ食トシ。又猫ノ食トス。其子ヲカズノ子ト云。一胞細卵數ナシ。風乾メ四方ニ出ス。（新きもの黄白色上品とし。陳きもの紅黒紫色下品とし。）用ヒテ歳首及ヒ嫁娶ノ祝具トス。子孫繁榮ノ義ニトル。又カドノコノ轉語也圧云フ。數胞ヲ合テ。形ヲ正方ニコシラヘタルヲヨセト云ヒ。又ヨセカズノコト云。形扁長ニコシラヘタルヲノシカズノコト云フ。又生子を塩藏にしたるをツケコ又ツケカズノコといふ。呂氏春秋ニ。魚之

ガラス使用

美者。東海之鯑ト云ハ。カズノコナルベシとなり。按ずるに昔より鰊鯑と書てカズノコとし。鰊或ハ鰊の字をカドに用ゆ。鯑の字ハ字書にみえず。鰊ハ集韻に音東、似「鯉鰊ハ音煉似鯶」とありて。こも詳ならず。何の書によりてカドに充るや知べからず。

直按ずるに。新井白石の蝦夷志の注に。加登佁用鰊字所「出未詳」といへり。採薬使記にハ。カド和俗鰊ノ字ヲ用ユ。東海ニ出ルヲ以テナルベシと。後藤梨春いへり。

蛇足

畫蛇着足の諺昔より是あり。されど明の張鼎思が瑯瑯代酔編に。曲江老兵捕一蛇焼之四足金出如雞足形。以此知古人有未畫窮之事といへり。予此説を信ぜざりし。先年熊野新宮桃泉寺山の麓にて。一蛇長さ四尺許の者。猫と闘ふ。山人これを殺ス。四脚ありて形圖の如く長さ二寸許。指ハなく末に銀針のごとき四五分許のものあり。數を

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

十縦横に生ず。太地浦の太地氏一脚を藏せしを。其後本府の杉山氏乞求めて今に藏せり。これにつきて張氏の説妄ならざることをしる。又薩州にヤマダヘビといふものあり。腹より下に二足ありて。物と闘ふ之紀。必ず出ると聞り。其実否を志らず。又本草に。陶弘景の曰。燒地令熱以酒沃之置蛇于上則足見。或は酉陽雜俎に曰。蛇以桑柴燒之則見足出などの説あり。いまだ試みず。

直云。文政紀元戊寅五月。本府の昌平河岸にて一蛇を殺り。長さ五尺許常蛇と異なることなし。只腹下の左右鱗朧腫よる所あり。こゝを裂ば二足あり。長さ二寸五分許。形鼠脚の如し。桃泉青山にて獲る四足あると異なり。薩州のヤマダヘビといふものも類なるべし。其後蛇の足あるもこれを云ば（全く常蛇とハ別種なるべし）

冬蟲夏草

又夏草冬蟲ともいふ。舶來の者ハ長さ一寸餘。巨き筆管の如く。色蒼黒にして。蟲は方微に黄色を帯ぶる。乾き久くなるもの。恰も柴胡の形の如し。廣川氏の長崎

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3,附録』　請求記号 W391-N1　ガラス使用

聞見録に。清商より腎薬なりとて。大に珍とすることを
いへり。此品唐山にても古ハな記者にや。康熙已前乃
書に載ることなし。呉儀洛が本艸従新に曰。冬蟲夏草甘
平保肺益腎止血化痰已労嗽　袁棟が書隠叢説に
曰。夏草冬蟲浸酒服之可以却病延年　徐崑が柳崖外
編に曰。冬蟲夏草和鴨肉頓食之大補。　七十一が西域
聞見録に曰。夏草冬蟲入薬極熱。　魯華祝が衛藏圖識
に曰。冬蟲夏草。性温煖補精益髓　唐秉鈞が文房肆攷
圖説に曰。夏草冬蟲保肺氣實腠理功用不下人參（以上六書）

の全文ハ。近年多紀氏が著せ
醫賸に載せバ。こゝに贅せず。　按に。冬蟲夏艸を本邦
所々に産す。陽地にハ絶てなし。江州にてハ。鼠梧桐の
根に生じ或ハ地上。或ハ土中二三寸にもありといふ。
其形種々あり。近年柚木常盤といふ人。観音寺邊山中
にて採り出せしに。皆其菌口中より出て。舶来頭上と
より苗出ると異なり。形状下に圖するがごとし。又熊野に
てハ。桑樹の本に生ず。長さ二三寸。細き筆管乃ごとく。
茶褐色にして能蠕動す。口中より絲のごとき者叢り
生ず。又文化二乙丑年霉雨の後。本府の東北出水村を

冬蟲夏草　江州産

冬蟲夏草　同産異形者

冬蟲夏草

日前宮國造家後園産

過るに。溝邊に虫ありて。形油虫に似て淡黒色蠕動す。口中より高さ四五寸許葉出て白茅の如し」文化五戊辰年六月日前宮國造家の後園にて得たるなり。形すこぶる伏蛸の如きもの三箇重り。背より茅葉のごときもの多く叢て生ることを上に圖するが如し」又加州に方言ケラヨモギと呼ものあり。形土駒と同形にして。首より艾の如き草を生ず。これ冬蟲夏草の屬なりといふ。予いまだ此品をみず。此餘諸州を採索せば。尚種類多かるべし。

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆．巻1～3，附録』　請求記号　W391-N1　ガラス使用

直海云。文政七甲申の年秋八月。筑前福岡伊丹氏の庭中に。冬虫夏草二三十本も聚り生ぜし。形蛻の蝉の如く。全躰は根にあり。形水松子の如き高さ三寸許の草を頭上に悉く生ぜりと聞り。予按に。疑らくはこれ冬虫夏草にはあらじ。和名セミタケ又セミノキ（近江）と呼ものにて。即ち本草に載る蝉花。一名冠蝉。宋の宋祁が益部方物記に。蝉花蝉之不蛻者。至秋則花。其頭長一二寸。黄碧色。治小児瘈瘲又能瘵已といふもの此是なるべし。

桃洞遺筆巻之三終

附録

小原良直　著

氈鹿　附　麢羊（麞）　山羊

氈鹿は。古名カマシヽ。日本書紀に。皇極天皇二年冬十月の蘇我臣入鹿獨謀將廢上宮王等而立古人大兄爲天皇。于時有童謠曰。伊波能杯儞（石上）。古佐屢渠梅（猴米）野倶（焼米）。渠梅多儞母（尚）。多礙底騰裒羅栖（奉而行去）。歌麻之之能（加麻之之）。烏膩之（老翁）いふ是也。一名ニク。又クラシヽ（信州）カマシカ（本朝食鑑）トジカ（藥舗）カモシカ（俗）アヲシヽ（南部）カベトリ（飛州）カベ（同上）

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

保依友のかくさき
考る大医博士

かもしの名也。谷川士清の書紀通證に。加毛之々。謂氊鹿也。氊の古名を。加毛といふ。與冬爪云。加毛宇利。義同。又云。爾久以此皮為褥也。和名鈔。褥此間迩久。毛席名也。とみへ。此獸全身黒色或ハ褐色或ハ黒褐色にして白斑ある者あり。羊の大さにして兩角並び生じ。長さ五寸許。色黒く内空し。本ニ横皺多くありて。外に節なし。足下ニ岩スイ野熊と云ものありて。能壁立る處を登るといふ。和名鈔に。麢羊和名加萬之々といへり。延喜式に。羚羊角をカマシヽノツノと訓し。深江輔仁本草和名ニ。零羊角和名加末之乃都乃（丹波康頼の醫心方ニ。加末之乃都乃ニ作る。）とあり。

深江輔仁ハ時代未考、法曹類林ニ、承平六年侍醫深根輔仁ニとあれバ、同人なるべしと或人いへり、考ふべし

故に。今ニ至て薬店ニカマシヽの角を。和の羚羊角と名けうる。皆誤りなり。氊鹿ハ（漢名詳ならず）。麢羊羚羊零羊ハ。一物にして和ニ産なし。角ハ舶来あり。形牛角の如く徑寸餘。長さ尺許。直ニして末微し尖り。白色にして黄色を帯る。節ハ多くして竹筍の皮を去るか如く。末二寸許ハ節なし。外透明。内ニ巨き心ありて木の如し。本草綱目ニ。雷斅が曰。凡用有神羊角。甚長有二十四節。内有天生木胎。此角有神力。明の倪朱謨が本草彙言ニ曰。羚羊角白亮

如玉。長七八寸。本草從新に曰。羚羊角明亮而尖不黒者良。これ等の文によりて。氈鹿の羚羊にあらざることを知べし。氈鹿ハ。夜角を木石に掛て臥す。本草綱目に。羚羊懸角木上以遠害といふに同じき故に。氈鹿を羚羊とす。然ども角の大小形色皆異なると記ハ。羚羊ハ決て氈鹿にあらじ。又書紀に。前の態歌を載し下に。山背王之頭髮斑雑毛似山羊とあり。此山羊にカモシヽと訓をつけたり。これ亦穏ならじ。朝鮮にてハ羚羊を山羊といふ。郷薬本草に出る。本草綱目の山羊

ハ。[redacted]和産なれども。詳に本草啓蒙に載れバこゝに畧す。尤氈鹿に充るべきものにあらじ。又君山の本草正偽に。麞をカマシヽに充る。大に非なり。麞ハ本草綱目に。無角といへり。往年水戸黄門義公。朝鮮産の麞を常陸山中に放さしめ玉ふといひ傳ふ。形鹿よりも小く黄黒色角なく牙ありて野猪牙の如く口外に出る。牝には牙なし。耳ハ三寸余あり。洲濱草（漢名麞耳細辛）の葉に似たり。此獸を朝鮮にてノロといふ。今舶來の末皮ハ即此麞皮なり。以上羚羊山羊麞の三物。氈鹿に充らじ。

何をもつて充べきや考べからずと。蘭山翁いへり。予按に。清の張綱孫が獸經に。羚羊を載るの外に。麡を載て以林而掛角といへり。又康熙字典に。麡音齊。麡狼獸名。似鹿而角向前入林則挂其角故常在淺草中逐入林則搏之也といわ。恐くハこれ鐂鹿なるべきか。尚後考をまつ。

北瓜　附 月明瓜

近年讃州より。一種の西瓜を出ス。白西瓜といふ。形常の西瓜より皮薄く白色にして。瓤子ともに紅色あり。味至て甘美にして常品に勝る。按に。群芳譜西瓜の附録に。北瓜。形如西瓜而小。皮色白甚薄。瓤甚紅。子亦如西瓜。而微小狹長。味甚甘美。與西瓜同時。想亦西瓜別種也といふ。即是なり。又今世上に白西瓜と呼をれいへり。皮白色にして。瓤淡黄色なり。これを明の李中立が本草原始に載る月明瓜にして。北瓜とハ別なり。

野槌蛇　附 千歳蝮

嘗て聞く。和州吉野山中。本州熊野奥等に産れと。其形ハ長さ二尺餘頭尾均くして尾尖らず。槌の柄なきがごとし。全身蝮蛇の如く。口大にして能人を噬む。甚毒

阿里もいふ。古説に千歳蝮ハ克きども。本草綱目頌の説に。有四脚といへバ克らん。按ニ嶺南雑記ニ。瓊州有冬瓜蛇。大如レ柱。而長止二尺餘。其行跳躍逢レ有レ声。螫レ人立死。といふ。これ野槌蛇なるべし。○千歳蝮を詳ならん。本草啓蒙に。信州戸隠山ハ高クメ雪深ク。六月ニ非ザレバ登ルベカラズト云。其神社ヨリ奥ニ。三十餘抱ノ珍ラシキ大松アレドモ。六月比ハ山カヾシト呼ブ毒蛇アリテ。人ヲ害スルヲ畏レテ。登リ見ル人稀ナリ。其蛇ハ四足アリテ石龍子ノ形ニ似タリ。人声ヲ聞ケバ後足ノミニメ立テ人ノ来ルヲ待ツ。若螫ルレバ毒猛ケレドモ。蝮蛇ヨリハ軽シト云フ。此類ナルベシといへり

手蔓藻蔓

橘菴漫筆二編に。事多端にして繁ク。又衆議區々にして。攻談しがゝら紀時をてづるもづるといへり。このわる事ならやと思ひしよ。摂州兵庫の西高麗が林氏沖の海底より。手蔓藻といふ者出る。近頃和蘭人是を知て求め帰るよし。薬能ありて世に用ひ覚えたり。これを採ハ九月を時とすといへり。按に手蔓藻蔓ハ一名海牡丹。シワヒトデ（本州熊野）マツダコ（同上）テンズモンズ（同上）シャグマ（同日比浦）シャヽラシャグマ（同加太浦）天蔓藻（同若山）手蔓藻（摂州）テンズ

此所モ一行ニ
九二字ヅヽ
ヲ為下ル

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

モンヅル（同上）テシツクモンツク（同上）テンバ（同上）デンパチ
（豫州）ガラコ（同上）ハナダコ　シウ（阿州）ツナツカミ（肥前）ホ子ツギ（同上筑前）シャク
シヤラ　ノヅカミ（讃州）ノウツカミ　ナルカシラ（房州）バシシヤガヒ

（尾州）形状圖の如し。（海中にありて能蠕動す）大さ三四寸許。赤黄白の三色あり。本草啓蒙に。末ト為テ酒ニテ服メ胸痛ヲ治ス。又煎服メ疝ヲ治ス。又生ナル者ヲ末ト為シ酒服メ打撲瘀血アル者ヲ治ス。又足ヲ取リ焼性ヲ存メ酒ニ服シ。或ハ末トナシ。米飯ニ和シ傳ルモ可也といへり。又摂州大坂にて全く焼て霜となし。これを天鶴霜と名け售る。痰咳を治するに妙也と云これ本渾原始に圖せる所の。海盤車の屬なるべし

都鳥

萬葉集に。布奈藝保布保利江乃可波乃。美奈伎波爾伎為都々奈久波美夜故杼里香蒙とこそあるをはじめにて。伊勢物語に。なほゆきゆきて。武藏の國と志もつふさの國との中に。いとおほきなる河あり。それをすみだ河といふ。（中畧）志ろきとりの。はしとあしとあかき。志ぎのおほきさなる。水のうへにあそびつゝいをゝくふ。京には見えぬとりなれば。みな人見志らず。わたしもりにとひければ。これなん都鳥といふをきゝて。名にしおはゞいざこととはん。みやこどり。わがおもふ人ハ。ありやなしやと。云　阿佛

冲

尼が十六夜日記に。尾張のくに鳴海がた潟を過るに。（中略）もみゆる河のまことにはおそありと知しかど。都鳥といふ鳥のはしとあしと赤さ。此浦まもあれり。おもしつる觜と足とはあかざりし。まうちもむかしの。とやことゞりこのも。此外古歌多し。大抵は藤原長清が夫木和歌鈔。契冲が勢語臆断に載せたれど畧す。海にも河にも濵にもよみ。又色はしろくて嘴も足とは赤きよしいへるも共多し。予按ず。都鳥は諸説紛々として一ならず。下學集に。鷗日本ニ所謂。都鳥云者歟といひ。臆断および季吟が伊勢物語拾穂抄。真淵が伊勢物語古意。千蔭が萬葉集略解などに鴎とせり。本草啓蒙にも此説に従ふやう。近年高田與清十六夜日記残月鈔を著して。鴎也もち夫乃説千古不易の確論なるべしといへり。鴎に品類多し。本草啓蒙ニ詳にあれバさてにみせん。都鳥といふハ。野必大が本朝食鑑に曰。京師歌客語テ曰。伊勢物語ノ都鳥者鴎也。京客不知鴎鳥ヲ捉テ其形ヲ問。叢以有美夜稱。予未知其真偽ヲと。これも疑はしき鳥の。嘴も足も赤くしてみやびかなる貌ゆへ。ミヤコ鳥といふもそれ説あり。残月鈔には。本草啓蒙に。鴎を子コドリ（筑前）子コサギ（筑後）海子コ（上總）ハマ子コ（武州）ともよぶといへり。この鳴声は猫に似たるが由ゑ。源氏の若菜下に。猫ねう〳〵といとらうたげになけバ。今打さくにも。ニヤウ〳〵となくが如し。鴎も。ミヤ〳〵となく声の。子ウ〳〵とも。ニヤウ〳〵とも。うのひてきこえて。猫の声にいと近ければ。其猫とも

名をもよびしなり。さて都鳥のミヤは声によりておほせ。コドリはよぶこどりもゝちどりなどの小鳥に同じく。大鳥に對へし称なりといへり。ミヤコドリの義。両説ともよくかなへれど。猶考ふべし。又都鳥をすへ鴴と書る。此字を考るに字書に見えず。勢語古意に。鷗の字を草書より誤まれるなりといへり。（以上鴴を都鳥とする諸説也）○古今著聞集に。院御随身右府生秦頼方みやこどりを得る殿上人にはなたせらるを。成季にあづけられて飼り。くひ物なども手づからよろづの虫をとりそへ飼へ心をくおぼえて。ゆゝしきもののいなるぞなりて。小田河美作茂平がもとへやりてかはせ給し。云云のことを載たり。この記は何物をさして都鳥とよめるか詳ならねど ○大和本草に。或

鷗ヲ以為都鳥未知是否。今案西土ニテ都鳥ト稱スル鳥アリ。背ハ黒ク。腹脇白ク。嘴ト足ト赤シ。嘴長シ。ケリノ形ニ似テ其形ウルハシ。伊勢物語ニイヘル都鳥是ナルカといひ。筑前續風土記に。都鳥嘴足赤シ。白黒斑ニテ大サハ其形ケリニ似タリ。此鳥伊勢物語ニ載ル都鳥ニヤ決シガタシ。香椎ノ潟ニノミアリとあり。これは筑前の方言の都鳥にて。真物にはあらじ。本州へも稀に来る鳥にて。方言黒トリとよぶ。（水鷄の一種に黒トリあり。又土佐日記に黒トリあり。これ同名なり）○寺嶋良安の和漢三才圖會鷗をも出せる外に。都鳥。正字名義未詳。大サ如鸛鷯。白色。唯嘴與脚正赤。關東多有之。畿内未有之。人亦不會之。有業平視都鳥於隅田川之語といへるはうけがたし。都鳥はこれ鴫の屬なることを志るべし。

ガラス使用

△此下ノ下ヘ入ルベシ
〇和訓栞後編に都鳥ハ一説に鴎のことゝいへり。或ハ鸂鶒のことゝいへりとあり。此鸂鶒に充るハ大なる誤なり。

て。伊勢物語に據て妄に書せしものなるべし〇直海龍の廣大和本草に。駿州ニテ土人呼テ都鳥ト云モノアリ。鳧鷖ノ属也といへるハ何物か詳ならざれど。此書杜撰多ければ信ずべからず△〇齋藤彦麿の勢語図説抄に。都鳥ハ歌。代々の集にあまたよめるものぞ。皆水鳥をよめる也。その中に宇津保物語に。名にしおふ関を越し。都鳥。声もをかしきを百しきにして。又六帖に。めづらしく鳴もさゆるかの。都鳥いりまなきぞ年をへぬらん。是も人の住るやどに。都鳥。音づきなえて。年ぞへにけるなどこの外にも水鳥とよめるもいひおとし思ハず。ミサゴ島まてハいかざるか。サモヤとよみて相通ふ音なり。和名鈔に。雎鳩。和名美佐古。鵰ノ属也。好テ在ニ江邉山中一。亦食フ魚ヲ者

也とあれバ。水邊にすむものなれど。山林にも住りとみゆ。又万葉集に。佐を夜に誤りしにハあらざるか。字體能似よりといへり。予按に加納諸平云。名にしおふと云こゝろえられし歌をもちて。都鳥ハ海邊ならでも。山中にても啼く證に引るハ誤なり。亭子院の帝。吹上の宮よりすへらせ給ふなり。吹上は海邊にて。彼島はおほくをさて事によめる哥の中なり。関をも越しとよめるハ。白鳥は関の事なり。委ハ宇津保は吹上上下は巻を開て志るべし。よりや白鳥は関をその哥よめり。海辺に近けれハ。此鳥の行かふこともありやし。むかしなれど。今も山口の驛などにありや。このまめみゆるなし。又美佐古とりなりといへるも甚しきひが事なり。〇

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

草正偽ナリ。本朝食鑑ニ。鴎ヲ都鳥トス大ニ誤レリ。鴎ハ大サ鳶ノ如ク。灰白色ニメ觜足倶ニ黄ナリ。都鳥形小クメ鷸ノ如シ。翅ハ白ク黒點アリ。觜足共ニ紅ナリ。尾州鳴海辺ノ海濱ニアリ。都シギト云。阿佛十六夜日記ニ。鳴海ノ浦ニシテ。都鳥ヲ見ル歌アリ。是ニ合ヘリ。武州ノ海邊ニモ有之。野必大ハ東都ノ人ナリ。隅田川ノ都鳥ヲ辨ゼザルハ何ゾヤといへり。此説是ナルニ似て非なり。鴎ハ前にもいふごとく。品類多し。江鴎などハ觜脚赤し。鷲鴎なども觜脚黄なり。又淡黒色のものあり。黄と限るべからず。又都シギハ勢州及び紀野海辺にもあり。濱シギともいふ。此鳥を以て都鳥に充るものハ本州海辺所にて呼る。方言紅カモメといふもの是なり。春月ハ細鱗魚の子を追て紀の川上ヲさかり。鴎と交り居る鴎の属にして。形鴎より小さく。嘴脚共ニ朱色。全身白色にして。捕へ見れバ粉紅色なる所あり。て至て美なり。勢語の文と能合へり。按ニ清異録ニ晉官者劉継詮得芙蓉鴎二十四隻ヲ以テ献ス。毛色如芙蓉ノと云し。（清の周櫟園が）閩小紀ニ。莆田九鯉湖中ノ鴎作ニ粉紅色ヲ嬌艶異常ニ（又明の謝肇淛の文海披沙ニ芙蓉鴎の事あり）といへるに此属なるべし。実ニミヤコドリなり。鴎の属にて。まじはり居るものなれバ。鴎とひとくくる説穏なれども。鴎ハ古くかもめといふ名あり。而て都鳥とはいはれ。形状まことに紅カモメに似たれバこれ都鳥なることを疑なし。和歌者流秘事口傳などことしくいへハ今詳に辨ぜざるや。

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

桃洞遺筆初編　引用書目

日本書紀
釋日本紀
日本書紀通證
古事記傳
延喜式
和名類聚鈔
新撰字鏡
下学集
和訓栞
譯傳雜字簿
伊勢物語
伊勢物語拾穗鈔
伊勢語臆断
伊勢物語古意
勢語圖説鈔

卜部懷賢輯
谷川士清著
本居宣長著
藤原時平等奉勅撰
源順撰
僧昌住撰
文安元年東麓破衲序
谷川士清撰
北村季吟撰
沙門契仲著
加茂真淵述
齋藤彥麿呂編輯

宇津保物語
源氏物語
枕草紙
同春曙抄
同抄
同異本
土佐日記
十六夜日記
十六夜日記殘月鈔
萬葉集
萬葉草木異名集
萬葉集畧解
夫木和歌鈔
古今和歌六帖
仙覚萬葉集註釋
躬恒集
藻塩草
言塵集

舊題源順撰
舊題紫式部著
清少納言著
北村季吟撰
闕名
群書類聚中收載者
紀貫之著
阿佛尼著
高田與清編纂
舊題橘諸兄公撰
俊頼撰
橘千蔭著
勝田長清輯
舊題紀貫之女著
月村齋宗碩著
今川了俊作

本朝医考
黒川道祐

異名分類抄
冠辭考
性靈集
性靈集抄
孝經樓詩話
古詩韻範
醫心方
醫賸
本草和名
本草別集
本草正偽
本草正ゝ譌
本草藥名備考
本草綱目啓蒙
大和本草
廣大和本草
本朝食鑑
食療正要

入江昌喜撰
加茂真淵著
釈空海
釈尚敬
山本北山
登ゝ菴
丹波康頼
丹波元簡
深江輔仁
稲若水
松平君山
山岡恭安
闕名延宝中成
小野蘭山
貝原篤信
直海玄周
野必大
松岡玄達

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3, 附録』 請求記号 W391-N1　ガラス使用

巻懐食鏡	香月牛山
庶物類纂續編	丹羽貞機
詩経名物辨解	江邨如圭
雲根志	石亭
花彙	小野蘭山
野山草	橘保國
蘭品	松岡玄達
介品	同人
垣津旗考	伴信友
獨脚蜂記	小原峒山
採薬使記	宝暦中成
常毛採薬録	宮地維則
南海包譜	村瀬乾徳
奎遊小牘	小野蘭山
六物新志	大槻玄澤
遠西医方名物考	宇田川榛斎
譯鍵（中大西药名）	
物印満	和蘭本草設色書
常陸國誌	寛永年中成
筑前續風土記	貝原篤信
飛州志	長谷川忠崇
奥羽観迹聞老志	佐久間義和
南紀名勝志	官撰李梅溪撰
紀州舊跡志	同上
野峯畧記	文化年中於高野山成
野山名霊集	
長崎聞見録	廣川
木曽名所圖會	秋里籬島
蝦夷志	新井白石
伊豆海島風土記	闕名
琉島畧記	同上
秉燭譚	伊藤長胤
輶軒小録	同上
橘菴漫筆	田仲宣
玉勝間	本居宣長
古今著聞集	橘季成

ガラス使用

詩経傳説彙纂

群書類従	
舜水朱氏談綺	安積覺序
和漢三才圖會	寺嶋良安著
法曹類林（残缺、）	
十王経	
十王経直談	天和二年照儀坊了意序
尚書	漢 孔安國傳
毛詩	漢 毛萇傳
毛詩草木鳥獸虫魚疏	唐 呉郡陸璣撰
詩経集傳	宋 朱熹撰
續詩傳鳥名巻	清 毛奇齡稿
三百篇鳥獸草木記	清 徐士俊著
春秋左氏傳	周 左邱明傳
爾雅註疏	晋 郭璞註 宋 邢昺疏
爾雅註	宋 鄭樵撰
埤雅	宋 陸佃撰
通雅	明 方密之撰

説文	漢 許慎撰
字彙	明 梅誕生撰
正字通	此書有數本、一本或題、明張爾公撰、或題、清廖百子撰、或題、爾公百子全輯、今考此書、本爾公所著、廖氏以金購淂之、因掩為己撰、有諸本互異者、蓋以此也、
康熙字典	清 康熙帝撰
清文鑑	清 乾隆中撰
廣韻	闕名
集韻	舊題 宋丁度等撰
諧声品字箋	清 虞聞子著
漢書	漢 班固撰
後漢書	宋 范曄撰
隋書	唐 魏徴撰
北史	唐 李延壽撰
舊唐書	晋 劉昫撰
新唐書	宋 欧陽修撰
通志畧	宋 鄭漁仲撰

月令廣義	明	馮應京撰
熙朝樂事	明	田汝成撰
大明一統志	明	天順年中成
大清一統志	清	乾隆六九年成
廣輿記	明	陸應陽撰
一握坤輿	明	鄧景南纂
萬暦廣東通志	明	黄佐譔
八閩通志	明	黄仲昭撰
盛京通志	清	乾隆四十四年成
畿輔通志	清	李衞等監修
山東通志	清	岳濬等監修
漳州府志	清	康熙年中成
邵武府志	明	陳讓撰
寧波府志	明	黄潤玉撰
嚴州府志	明	萬暦年中成
興化府志	明	嘉靖年中成
南寧府志	明	方瑜纂輯
荊州府志	清	郭茂泰等編纂
重修惠州府志	清	康熙年中成
續修臺灣府志	清	余文儀等續修
新修餘姚縣志	清	康熙年中新修
纂修南海縣志	清	郭爾戺等監修
建昌縣志	清	康熙年中成
海澄縣志	同	上
孝豊縣志	同	上
閩書	明	何喬遠撰
廣東新語	清	屈翁山撰
衡嶽志	明	彭簪撰
天台山方外志	明	釋無盡撰
説嵩	清	景日昣撰
益部方物畧記	宋	宋祁撰
會稽三賦	宋	王十朋撰
閩中海錯疏	明	屠本畯撰
蜀都雜抄	明	陸深撰
閩部疏	明	王世懋撰
滇南雜記	明	許伯衡撰

ガラス使用

粤西偶記　清　陸祚蕃　撰
泉南雜志　明　陳懋仁　撰
嶺南雜記　清　吳震方　著
雁山雜記　清　韓則愈　著
閩小紀　清　周亮工　撰
隴蜀餘聞　清　王士正　撰
遊城南註　宋　張禮　撰
遊名山記　明　都玄敬　著
遊台宕路程　明　陶望齡　著
溪蠻叢笑　宋　朱季公　撰
赤雅　明　鄺露　撰
星槎勝覽　明　費信　撰
瀛涯勝覽　明　馬歡　撰
瀛涯勝覽集　明　張昇　撰
職方外記　明　艾儒畧　撰
坤輿外紀　清　南敦伯　撰
八紘譯史　清　陸次雲　撰
譯史紀餘　清　陸次雲　撰
日本篇　清　胡雲容　撰

外國竹枝詞　清　尤侗　著
中山傳信錄　清　徐葆光　著
西域聞見錄　清　七十一　著
農政全書　明　徐光啓　著
救荒野譜　明　王西樓　著
救荒本草　明　周憲王　著
東醫宝鑑　朝鮮　許浚　著
幼々集成　清　陳複正　著
神農本經　明　盧濆　校
證類本草　宋　唐慎微　著
食物本草　元　李東垣　著
会物本草　明　李時珍　著
按此書晩明姚可成所編輯托名於李時珍耳
本草綱目　明　李時珍　輯
本草彙言　明　倪朱謨　著
本草原始　明　李仲立　著
本草選　明　張三錫　著
本草滙　清　郭宜章　著

国立国会図書館　　タイトル『桃洞遺筆. 巻1～3,附録』 請求記号 W391-N1　　ガラス使用

本草従新	清	呉遵程	著
本経逢原	清	張璐玉	著
郷薬本草	朝鮮	闕名	
薬方雑記	清	闕名	
珍異薬品	明	高濂	著
芥子園画傳	清	李笠翁	輯
文房肆攷圖説	清	唐秉鈞	著
衞藏圖識	清	魯華祝	著
平泉草木記	唐	李徳裕	著
魏王花木志	闕名		
蒔圃同春	明	夏旦	著
学圃雑疏	明	王敬美	著
花史左編	明	王仲遵	著
花卉百種	明	闕名	
汝南圃史	明	周文華	著
藝花譜	明	高濂	著
群芳譜	明	王藎臣	著
廣群芳譜	清	康熙帝	著
秋傳花鏡	清	陳淏子	著
花曆百詠	清	翁榴庵	著
天工開物	明	宋應星	著
戴氏竹譜	舊題	晋戴凱之	著
江南蛇品	清	陳鑑	著
蟹譜	宋	傅子翼	著
張氏獸経	清	張綱孫	著
水族加恩簿	宋	毛勝	著
呂氏春秋	舊題	秦呂不韋	著
容齋四筆	宋	洪邁	著
野客叢書	宋	王楙	著
丹鉛總録	明	楊升菴	著
徐氏筆精	明	徐𤊹	著
古今注	晋	崔豹	著
中華古今注	宋	馬縞	著
夢溪筆談	宋	沈存中	著
湖湘故事	宋	陶岳	著
餘冬序録	明	何孟春	著

續百川学海
普秘笈

七修類藁　明　郎仁宝　著
兲都載　明　馬大壯　著
五雜組　明　謝在杭　著
文海披沙　明　謝在杭　著
偃曝談餘　明　陳眉公　著
物理小識　明　方密之　著
池北偶談　清　王阮亭　著
書隱叢説　清　袁慢恬　著
物類相感志　宋　蘇軾　著
華夷花木鳥獸珍玩考　明　慎懋官　著
正説郛　元　陶九成　輯
續説郛　明　陶珽　編
古今説海　明　陸思豫　輯
瑯琊代酔編　明　張鼎思　撰
廣百川学海　明　馮可賓　編
廣秘笈　明　陳眉公　輯
龍威秘書　清　馬俊良　輯
紀錄彙編　明　沈節甫　輯

太平御覧　宋　李昉等　撰
錦繍萬花谷　不著編者名氏　輯
事文類聚後集　宋　祝穆　著
山堂肆考　明　彭雲挙　著
典籍便覧　明　范泓　著
彙苑詳註　舊題明王世貞著明鄒善長
重訂皆託名也一名王氏彙苑或名類苑詳註
三才圖會　明　王思義　撰
事物紺珠　明　黄乙正　編
事物異名　明　胡文煥　校
事言要玄　明　陳懋学　輯
採蘭雜志　闕名
古今類書纂要　明　璩崑玉　著
淵鑑類函　清　佩文帝　著
格致鏡原　清　陳元龍　撰
行厨集　清　李之彤　著
柳崖外編　清　徐崑　著
潜確居類書　明　陳仁錫　著

西京雜記	舊題晋人葛洪撰按実是梁人呉均所撰也
雲仙雜記	舊題唐馮贄撰
南部新書	宋 錢易 撰
東齋記事	宋 范鎮 撰
養痾漫筆	宋 趙溍 撰
縣笥瑣談	明 劉昌 撰
輟耕錄	元 陶九成 撰
農田餘話	明 真逸 撰
野記	明 祝允明 撰
山海經	晋 郭璞 註
杜陽雜編	唐 蘇鶚 撰
酉陽雜俎	唐 段成式 撰
清異錄	宋 陶穀 撰
文選註	唐 李善 註
離騷草木疏	宋 呉仁傑 著
皇明文徵	明 何喬遠 編
白氏長慶集	唐 白樂天 撰
楊升庵文集	明 楊愼 著
韻語陽秋	宋 葛立方 著
漁隱叢話	宋 胡仔 著
蜀中詩話	明 曹学佺 著
藝苑名言	清 蔣雲會 著